

真・女神転生square root

長月 海里

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日彼が迷い込んだ謎の場所、”異殻”。

救世主の到来を待つ信徒、しがらみからの解放を求める教徒。

異殻の中を駆けるサマナー、”それ”を良しとせぬ組織。

日常の切れ目に悪魔と出会った人々は世界が新しく変わるとき、一体どんな世を求めめるのか？

全ては彼の選択次第。

目次

1部―異殻の召喚士達 異殻の少女

異殻の少女	1
武器屋の聴講	4
入りの口	9
人造半魔事件	
学者の講義	13
交渉の基本	17
実践開始	21
初めての仲魔	25
凶兆を得る者	28
妖精の主	31
協定の理由	35
それを見つける	39
頻発の衝突	42
四字を持つ戦士達	45
主を絞め殺す	48
脱兎を追うのは	52
死中の活を獲る	55
異を覗く―1	59
異を覗く―2	62
第一次半魔工場襲撃作戦―1 戦前	66
合間の一時	69
第一次半魔工場襲撃作戦―2 強襲	72
第一次半魔工場襲撃作戦―3 鹵獲	75

第一次半魔工場襲撃作戦	4
撤退	80
日常の中	84
無視鬼の協力者	88
禍の中へ	92
異殻資料編纂	97
異殻資料編纂	100

1部―異殻の召喚士達 異殻の少女

I regard the brain as a computer which will stop working when its component fail.

なぜこんな世界に放り込まれたのかはいつまでたっても理解できない。

きつかけなんて御大層なものではなかつただろう。物語はうつかり期限がその日までなのを忘れていた通販の支払いをコンビニで済ませた夜十時半の帰り道から始まる。

家まで7、8分の帰り道、別に家でやってもよかつたが人もいないし大丈夫とスマホで送金完了のメールを確認してポケットにしまおうと――

「アンタ、まだ気づいてないの?」

ほぼ目の前で声がした。

しまった、やつぱり歩きスマホなんてするんじゃないか、と思いつ顔を上げて一歩下がり、謝ろうとしてようやく相手の出で立ちの随分奇妙なことに気がついた。

只今ゴールデンウィークの終わる5月の初め。そろそろ半袖が活躍しだしてもいい頃だ。が、彼女(女性だった)は耳付きの分厚い帽子にモッズコート、今から登山できそうなゴツイブーツとブラックジャックにすら心配されそうな厚着具合だった。

それだけならまだ寒がりなんだなあ…。で無理やり済ませてもOKだったのだが槍だ。

小柄な彼女の身の丈ほども長さのある棒。先っちょにぎらつく(ように感じた)黒っぽい穂先。

紛うことなき槍である。槍なんて初めて見た。

新手のカツアゲだろうか。

「…こんなドンくさいのマジでいるのか… 私ばっか見てないで周りを見なさい。周りを。」

意味がわからず呆然としていた僕にヒラヒラ動く左手とあきれた声で促され、ようやく状況を理解した。

いつものアスファルトの道、鉄筋コンクリートのマンションビル、愛想のない街灯、見慣れた光景が全部赤茶けた蟬の抜け殻みたいな物に覆われて異形の世界と化していた。

「なんじゃこりゃ。」

なんで気付かなかったんだろう。歩きスマホって怖い。

「こいつアホだホ。スライムの徒競走よりニブニブホ。」

「は？」

つまらない反応ばかりしていて申し訳ないとは僕も思う。が、ひよこつと彼女の隣に現れた雪だるまに可愛い声で罵倒されれば誰だって間抜けな声が出ると思う。なんだコイツは。

この二人だけ季節が違う。

「ごめんな、よくわからないところで口の悪い雪だるまに罵倒されて家に早いとこ帰りたいだろうけど色々こちらとしてもルールはあるし… あいつらは新参者の匂いを嗅ぎ付けたし質問はちよつと待つててくれ。5分で済ませるから。」

話がつかめない。あいつらって誰だ？

「フロスト、その重要参考人キープしておいて。」

「ホ。」

振り返りながらおもむろに両手に槍を構えたと思うと女の子の腕力とは思えない力強さで中空を薙ぎ払った。

『ぎゃー!!』

耳につく、不愉快な悲鳴（あまりに不愉快で奇声に近かった。）がして、ヒト型にはいやに小さくでどす黒い物体が3つ彼女の足元に転がった。

「ざまなーが忙しいからオイラが説明してやるホ。あいつらは『ガキ』。バカで弱つちくてオイラ達より食いしん坊なバカホ。オマエの匂いにオイラ達のことの考えずにオマエを食いに来たバカホ。」

僕の方にてととと近寄ってきて吞気にその『ガキ』の解説をはじめめる『フロスト』。

説明は（雪だるまにしては）大変上手いがすごく『ガキ』をバカにしている。口が悪い。

そんな間にも無双の如く彼女は次々現れる『ガキ』を薙ぎ払い（あのごつくて重そうな）ブーツで蹴り飛ばしていく。

「で、疑問に思ったかホ？あのバカは何でこの可愛いオイラは何なのかって。思ったかホ？」

真顔で迫って可愛いとか言わないで欲しい。

「思ってたなくともご紹介だホ。バカもオイラもみくんな”悪魔”。オマエみたいなニンゲンをぱくつと出来る超スゴイ存在なんだホ。」

「カイロを食い物と勘違いしてとろけた雪だるまだけどね。」

迫った『フロスト』に遮られて見えなかったがいつの間にか『ガキ』の山を後ろに彼女が立っていた。

こんなにないたのか…。

「説明お疲れ様。で？どこまで説明した？」

家で親御さんは待っていないか、時間に余裕はあるか？と尋ねる彼女に問題ないと答えるとじゃあちよつと来てくれと彼女に緑の生き物（これも『フロスト』の言う悪魔なんだろうか？）に乗せられ赤茶けた夜道を走る。

「悪いね、ニュービー見つけたら救助と説明は絶対やれって決められてるんだ。死者行方不明者なんて出したくないからさ。まず荒川行こうな。帰りも送るから。」

遠っ。

「今遠いって思ったホ。」

「あと20分もかからず着くよ。」

待って。今時速何キロ？チーターの倍は早い計算になるんですが。

武器屋の聴講

「ハイ到着。毎回足役悪いな、お疲れ。」

怖かった…。

時速200キロ越えの文字通り悪魔のタンデムで連れてこられたのは元は三階建てくらいの高層ビルと思いき正面入り口。勿論あつちこつち出来損ないのクツキーみたいなのでこぼこで中に入るにはなかなか度胸がいりそうだが入る感じなんだろうか。

「はいるホ。」

ですよね。

「中は普通だよ。割と。」

「割と…。」

「二ブニブ早く入るホ。重要参考人は速やかに移動ホ。」

「はいどうぞご案内…。こんばんは入るよ。」

べしべしと僕の尻を叩く『フロスト』にお構いなしにぼこぼこの扉を涼しい顔で彼女は開くと僕を中に招き入れた。

「こんばんは。」

「ホ。」

「し、失礼します…。」

中は彼女の言った通り明るくて掃除の行き届いた、割と普通の内装だった。

が、パツと見た感じは小さい楽器店のくせに並んでいたのは残念なことに長ドスだったり拳銃だったり銃刀法違反ぶつちぎりの商品たちだった。日本でこんな光景見れるとは想像してなかった。

「ようセフリ。あつちこつちで厄介ごと片づけてる割に拾わないとは思ってたがいに新入り連れてきたか。」

にたにた笑いながらカウンターの奥で店番していたおじさんが話しかけてきた。

「立川か国立かあたりで迷い込んだのを連れてきた。ガキどもが20も30もやってくるし、ここなら座って話せるしイサカがいれば説

る存在だ。ちょうどピカチュウもリザードンもコラッタもポケモンと呼ぶのと同じ感じ。人間以外ここで動くモノは真っ白い羽根の天のお使いだろうと黒山羊頭の黒ミサの司会だろうと全部悪魔だと思っただらうてもいい。」

（まだふざけているようにしか聞こえないが）大変わかりやすい例えを混ぜ込みながらさつきとは大違いの真面目な顔でセフリは話始める。

「で、ここは異殻^{いがい}。現実の世界とは時間の流れもルールも全く異なる殻に覆われた世界。」

「異殻…？」

「そう。」異なる殻^殻で、「いがい」。細かい説明はイサカ行き、詳しい話は後に回して次はこれだ。」

と、セフリはスマホを取り出した。

「この世界に入ると勝手に”COMP”って名前のアプリがインストールされる。見てみ、ページの端の方にあると思う。」

促されてポケットに入れていたスマホを確認すると確かに”COMP”と名前の付いたあまり愛想のないアイコンがページの端っこにひっそりと存在していた。いつの間に…。

「入ってすぐに”進入・帰還”のアイコンがあるだろ？これワンタッチで出入り可能… 押すなよ。説明は終わってないから。」

わかるわかるという顔を（後ろのツネキチじいさんと一緒に）しながら押そうとした僕をやんわり止めながらセフリもアプリを立ち上げる。

「”進入・帰還”以外にも色々機能はある。一つ目、”時計機能”。」
二つのデジタル時計が表示された画面を僕に見せる。

「現実の世界と異殻の時間が表示される。さつきの異殻の説明の時に言ったけれど現実とこちら側は時間の流れ方が違う。現実世界の月が満ちれば満ちるほど時間の流れが遅くなって欠ければ欠けるほど早くなる。数字で換算すると満月の時は八分の一、新月の時は三分の一。おかしいと思っただろ？すぐにでも帰せるような言い回しのく

せにわざわざ荒川まで連れてきて話を始めた事。今は大体異殻の時間の流れは現実の五分の一。向こうの日付が変わるまであと四半日はあるわけだ。わかる？

「

はい。」

つまり現実世界の一日がこの世界…異殻の五日ってことだろう。逆浦島太郎だ。

「時間の話はこれでいいか。次は…。」

「待て待てセフリ。お前一つ一つの説明はそこそこ上手いが全体的にはなっちゃんえぞ。第一”俺達”のことも名前だけじゃねえか。悪魔、異殻、アプリ、時間の説明はまあ出来てるが肝心の”サマナー”の話がまだだ。機能の話もサマナーを知らんと成り立たねえ。」

「だから私はイサカみたいにそういうのは得意じゃないんだよじいさん…。」指摘にあったから次はアプリの前に私達についてだ。」

うくん…と、うなりながらセフリはスマホを一度仕舞う。

「私やツネキチじいさん…ミナモトは武器を持って悪魔を仲魔にして悪魔と戦う『サマナー』。その中でも異殻での活動を専門にする『ニューエイジ』だ。」

サマナーとはいうけれどほかの呼称も結構あるらしい。

「なにがあつたつけ？”サマナー”、”サモナー”、”COMPENER”、”悪魔使い”、”エクソシスト”、”祓魔師”、”テイマー”…あとなんだつけ？」

「今この話いらんホ。」

「…『ニューエイジ』ってのは元々いた現実世界で『サマナー』やってる連中との区別のために使われてる呼び方だ。だからあんまり私達”は”使わない。」

”達”のところで死んだ目をしてため息をつくセフリ。

私達以外の『サマナー』が使うってことだろうか。というか、現実世界に悪魔使いがいるのか…。

「ここに迷い込んだ人間の大体は一発目に死なない限り大抵サマナー

になる。というか、私達先達がさせる。
させる……。

「じゃあ……僕も？」

「それは勿論。」

と、セワリは頷いた。

入りの口

「物事は一度知ってしまうと視野が広がってしまう。悪魔の存在を知った人間は常に悪魔の影を見て生きることになる。でもって異殻に迷い込んだ連中私達は異殻に迷い込むようになってしまふ。言いたいことわかる?」

「つまりまたふらつとここに来ちやうかも?… みたいな?」

「正解。しかも異殻を拒んで出入りしない奴ほど不安定になる。めんどくさいことにな。」

『来ちやうかも』に吹き出しているミナモトを無視して(目じりがピクピクしているが)深呼吸するとセヲリは続ける。

「異殻こころが怖いのもわかる。関わり合いになりたくないのも理解できる。けどね、迷い込む度迷い込む度私達が助けられるとは限らない。だから自分の身は自分で守れるようにして欲しいわけよ。少なくとも私は必要な人助けも、自分で解決出来るはずなのに出来ずに死ぬ人間を増やしたくない。」

「ゴイツ偽悪者のお人よしだからな。死人が出るのが嫌なんだってよ」

ぎよろりと睨むように言い放ったセヲリを指さしてミナモトはけたけた笑いながらぶち壊した。

「あのね、人が死ぬとか死なないとか人より10倍…。」

「じいさん!!!」

バーン!と入り口が開け放たれた。

「なんだいきなり。」

「弾ちようだい。」

はあはあ息をついている女性を一瞥するとぬらりとセヲリは立ち上がった。

「セヲリ…!?ブンキョーでぼ、暴走族!3人やられてる…!」

「忙しい日だな今日は。」

そういいながらミナモトはサイズにしてはなんだか重そうな箱を

カウンターに置いた。

「金。」

「送った。たびたび悪いね用事できた。家に帰すの日付変わってからになるかもしれない。フロスト!」

「待ったセフリ。そいつ連れてけばどうだ?」

「無理。」

素晴らしい即答だった。

「いきなりガイアーズは危険すぎ。すぐ終わるし。じいさんが話してればいいじゃん。ねえさん息切らしてるところ悪いけど応援呼びに行きな。場所はアンタしかわからないから。」

「はい…。」

言いながらずかずかと出口へと去っていくセフリ。

「おいマジでおいでくのかよおま——。」

ミナモトの音がまるで聞こえていないかのようにボタンと音を立てて戸を閉めて行ってしまった。

「あくあ。行っちゃった。」

何やらスマホを操作しながらつまらなさそうにミナモトはため息をつく。

「銃刀法知らずのおじさんと二人で待ってるなんて不安だよなあ。少年。」

「いえあの、暴走族とかガイアーズって…。」

「いかれたカルトだよ。ガイアーズがガイア教って宗教の教徒。暴走族ってのはそんなかでも飛び切りバカで危険な連中だ。」

インパクト強い宗教だな…。

「それはサマナーとは違うんですか?」

勉強熱心だな、と呟いて煙草をくわえるミナモト。ついでに僕にルマンドをくれた。

袋で。

「よくくわかんねんだなこれが。サマナー上がりっぽいのがいる気もするし違う感じのやつも多いし…。悪魔だらけのところにバイク持

ち込んで爆走^{はし}る狂人どもだし…。」

一番の問題はな、とミナモト一拍置いた

「追い詰められても逃げるでもなく死ぬまで暴れまわる奴ばっかだから情報がとれないんだよ。」

「え、じゃあセフリ…。」

「業だよなあ。19で人殺しまくらなきやいけないなんて。神も仏もあつたもんじゃねえ。どこ行っても悪魔ばかりだ。」

背低くてわからなかったけど年上だったのか。

いやそんなことじゃない。

「セフリはお節介焼きのお人よしだけでもそれが原因で自分をとんでもなく血生臭い手にしてる。アイツのあだ名教えてやろうか?『切っ先』だぜ?」

灰皿に煙草をぽいと捨てるのとカウンターの下から今度はペットボトルのお茶が出てきた。

「イサカとセフリにこの世界のあらましは教えてもらおうとして無学な武器屋が言えることはまあ、今まで培ってきただけの常識では待ってるのは破滅だけってことだな。な?」

「話してればいいじゃんとは言ったけども怖がらせろとは言ってない。」

「武器屋趣味悪ホ。」

はっや。

出て行って20分経ったか経っていないかでセフリとジャックフロストは傷一つない様で帰ってきた。

「どうだった?」

「暴走族3人。ラフィン・スカルとマッドガツサー合わせて5体。そう難しい話でもなかったよ。あとの処理にジヨバンニが来てたから任せてきた。」

先程座っていた席にまたひっくり返るように座ると僕より先にルマンドの袋を開けてもぐもぐと食べ始めた。

「アイスクレホ。」

「15マツカな。」

この人達本当に人殺して来たんだろうか。

しばらく2人と1匹でおやつタイムを楽しんだ後、セヲリは話を再開した。

「…異殻に迷い込んだ人間が一部例外を除いて発見者より年下の場合、発見者が異殻でのルールから戦い方まで基礎的な事を教える決まりになってる。わかりやすい言葉で言えば弟子。アンタ見た感じ高校生だろ?」

「はい。」

「じゃあアンタの管轄は私だ。別に見る悪魔見る悪魔倒せるようなサマナーになる必要はない。基礎的なことはなんとかするよ。第一発見者のせいで殺人鬼の弟子になることになって悪いな。」

殺人現場みたいな言い回しだな…。後やっぱり人殺してるんだな…。

「今回は邪魔も入るし私の説明は下手だしダメダメだったな。明日はイサカいるんでしょう?持ち越したな。明日の10時過ぎからでいい時間ある?」

「はい。」

じゃあまた明日も初めて会ったあたりでと言い、セヲリは僕を送ると立ち上がった。

「アプリの使い方はわかったな?じゃあお疲れ様…。あ。」

あの『ジード』から僕を下ろし、別れようとした寸前セヲリは何かを思い出したように呟いた。

「散々連れ回しておいて自己紹介して弟子にするのに名前聞いてなかった。」

そういえば確かに僕は名乗った覚えがない。衝撃だ。

「で、お弟子君。名前は?あだ名でいいよ。」

人造半魔事件 学者の講義

「よう、こんばんは。」

只今深夜10時過ぎ。約束通り夕べと同じ場所のいつもの道で待っていたらふつとセフリは現れた。

「この時間に女の子1人がコート姿で電車のるとまアゝ怪しまれてね。異殻通^なつて来たんだよ。さて。」

念の為と人気のない路地まで入るとセフリはアプリを起動させる。

「今日もとりあえず武器屋に行く。で…」

「イサカつて人に会うんですよね?どんな人なんです?」

「学者ってあだ名の文系院生だよ。文献解読とフィールドワークが専門。」

ジードに僕を乗せながらセフリは答える。

「文献解読?」

「悪魔の文字とかカルトの予言書とか。色々あるわけよ。他の連中もやってるけどあいつが頭ふたつくらい抜けてる。」

悪魔の文字読むってそれ抜けてるの實力だけじゃないんじゃないだろうか。

「リヤナンシー連れてるんだよ。」

リヤナンシーって…昔漫画で見たな。

「寿命と引き換えに男の人に文学的才能を与えるって言うアレですか。」

「いや、意外とどっちでもOK。」

「なんか言いました?」

「変わり者の悪魔つてだけ。ほら行くよ。あ、あと私敬語いらんかいら。」

モニョモニョ言っていたことの追求も返事もする前にリニアも真つ青な加速度でジードは走り出した。

「お邪魔します。」

「失礼します…。」

見上げるとイチモクレンが手を振っていた。振り返す。

「よお。上で待ってるぜ。」

カウンターの裏に回ってちよつと言ったところの階段を登っていくと長い髪の美女がふわふわと浮いていた。

「あれがリヤナンシー？」

「あらボウヤ、ダメよ。女の人にあれなんて言っちゃ。」

女性の扱いがなくなってすみません。

「こんばんはリヤナンシー。」

「こんばんは。中で待ってるわよ…。」

「どうも。これ神田で買ってきた詩集。」

「あら、ありがとう。」

株上げ上手いなこの人…。

「こんばんは。」

「おじやまッ」

無言で読み始めたリヤナンシーを傍目にドアを開けてウワサのイサカとご対面…。する前に足元の紙に滑って頭からこけた。

「んぐッ！」

「イサカアンタ書き散らした紙はまとめろって何回言わせるんだよ。」

「あ〜ごめんごめん。新入り君大丈夫やった？」

頭が大分大丈夫じゃないです。

ひっくり返って見上げたイサカは学者のあだ名の割にもやしやオタクな感じもマッドな感じもない普通の人だった（清潔感あるジーパンに麻シャツメガネだったし）。でも異殻（いこく）の人である分普通じゃないんだろうな…。

「そいで？…このセヲリのお弟子君に異殻とサマナーのイロハを教えるほしいってわけやな。」

「私じゃ順番に教えるのも理解させるのも限界があつてここなら資料

も多いしいざとなったらアンタの助手に出来るし…。」

押し付け狙ってんじゃないすかお師匠。

「心配せんともやること変わらんからそんなシヨックな顔せんでええんやで。やりたきや一通りやってから頼むわく…。さて。異殻の構造やら何やらは必要なしでサマナーとしてはまずはこれやな。」

バサツと東京全体が描かれた大きな地図を出してきた。

色々なところにマーカーが引いてある。

「最低限覚えなあかんのは、まず東京の勢力図とか危険エリアやな。異殻自体は地球全部覆つとるけど今んところは知らんともええやろ。」

「えっ地球全部?」

「海外旅行でふざけてアプリ使ったら入れたんだってさ。英米中仏伊豪南極…。まアここまで行ったら全域だろうってなったわけ。入んなきゃいいのよ。入らなきゃ。」

誰だよ南極行つたやつ。

1人資料の山となつている本棚から漁つて読書をしていたセヲリが代わりに答えたがなんか顔が渋そうだ。

「で、まず千代田区、新宿、あと墨田。ここ行っちゃダメな。」

マーカーで真つ赤になつた3箇所を指差す。

千代田と墨田つて超隣じゃん。

「気持ちわかるで。新宿はガイア教、墨田はメシア教の本拠地でな。人間が一番怖いエリアなんさ。わかる?ガイア教とメシア教。」

「ガイアースなら昨日私がクソバイク潰してきた。」

「そりやお疲れ。ガイア教は自由と混沌。メシア教は法と秩序を教義にするカルトなんさ。詳しいことはまた今度な。今は触るな危険のカルトでいいから。で、千代田区。ここはとにかく危険な悪魔がうじゃうじゃおるん。もうマジでうんざりするくらい。」

うじゃうじゃ…。

「特に霞ヶ関はヤバいで。なくセヲリ。」

「二度と御免。」

セヲリにここまで言わせる霞ヶ関のなんかヤバいのは相当らしい。

「とにかく寄らないこと。行っても誰も絶対助けてくれへんからな。入ってしもたらすぐ現実帰ること。死ぬよりはマシやから。…で、どこになんで行ったらいかんかわかった？」

「新宿、墨田はカルト、千代田は悪魔がとにかく危険ですよね。」

「そう。で、今度はここ。何があるかわかる？」

と、今度は水色で囲まれた台東、武蔵野、港区、江東の一角を指差す。

「ここ遠足で行ったことあるな。」

「公園ですか？」

「地理勉強しとって偉いな。正確には恩賜公園。ここは話のわかる悪魔と協定結んであるから何もせんだら安全地帯。イタズラくらいはあるかもしれないけど。」

悪魔と協定…。

「協定なんか組めるん？ツてなるやろけど意外と行けるもんなんさな。ほら、セフリ悪魔使ってここ来たり戦ったりしとったやろ？それって大体悪魔と交渉して仲魔になってもろてやつとんのさ。」

交渉の基本

「さーこつからがサマナーの基本や。悪魔と会話して利点妥協点を見つけて出す。通称、『悪魔交渉』。」

「悪魔と交渉ってそうそうできるもんなんですか？」

「そこそそと机を漁ってスマホを持ってくるイサカに僕は訪ねた。」

「向こうから話しかけてくることもあればこつちから積極的に行くのもありや。ボコボコにしたたらやめてくれるならって言うてくるときもある。」

どっちが悪魔かわかんないなそれ。

「交渉そのものはセヲリの方が上手いから実技は向こうに任せるとして交渉に必要なのはこれ。」

と、スマホからコロコロコロンと何かを取り出した。

… スマホってアイテムボックス機能あったっけ。

「おもしろいやろ？ スマホからこんなもん出てくんの。これは魔貨^{マツカ}。異殻^{かいもん}… というより悪魔の通貨やな。悪魔交渉の必須やけど買物^{かいもん}にも使える。わかりやすく言うて雇い賃。普通に渡しても連中、吊り上げに吊り上げてくるしやっぱやくめもやってくるからどんだけ安く出来るかに腕が見えるな。」

渡されたマツカを翳したり手に転がして見る。

「つまり、これをあげるから仲魔になってって言うわけですか。」

「そうそう。まあ他に物欲しがったりするやつもおるけどこれが基本。で、次は『生体マグネタイト』。」

と、もう一つの塊を僕に手渡した。

「これは悪魔が肉体を保つ為のエネルギー。人が生きてくにタンパク質が必要なんと同じ感じで欠乏してくると弱るし無くなると召喚出来なくなる。」

悪魔は情報^{いきもん}が生き物になったもんや言われてるからな。ソフト動かす為のハードの素みたいなものや。と僕から回収したマツカとマグネタイトをくるくる指で遊びながら言った。

「この2つは悪魔を倒しても出てくるし、然るべきところで交換も出

来る。その辺に落ちとることもあるけどな。」

金落としてんじゃないよ。不用心な。

「さつき千代田が悪魔すごいって言ってたでしょ？あれマグネタイトがあそこにごいっばいあるからなわけよ。マグネタイトは精神のエネルギーが固まった物でね、思想せいと感情いの中心地ぼに大量にあるつてわけ。」

「ちなみに複雑な思考と感情のモン程よく取れるらしくてな、人間は美味しいらしいで？二重に。」

シャレにならんのでやめてください。

「で、あとは月。悪魔は満月に近なるほど興奮して話が出来ん代わりにマグネタイト保有量が増えて新月ほど逆になる。お弟子君、ここから導き出せる答えは？」

おちやらけて尋ねるイサカに僕は少し考えて答えた。

「マグネタイトを稼ぎたい時は満月に、仲魔が欲しい時は新月についてことですよね？」

「そう言うこと。。。さて、座学の基本はこんなもんやろ。次やお師匠殿の時間やで。」

「明日が終わるのは大体現実世界の4時頃。休む時間も含めてたっぷりあるからそっちの基本もじっくりやるよ。それとも一眠してからやる？」

時間気にしなくていいのは便利だな…。課題とかもゆっくり出来そうだな。

「ああ、実際やるで？こんな便利なもん使わんの損やさかい。課題がちんたら出来るの最高やで。」

考えることは皆同じだな。

それはそうとして。

「今からで。」

「じゃ、下行くよ。まずは武器見繕わないと。」

「あ、おもしろそうやで一緒に行く。」

「勝手にして。」

下に降りてきた3人衆を傍目にミナモトはタバコを吹かせる。

「終わったか？早いな。」

「今から実戦。…で、我が弟子殿にいい武器ある？銃以外にして欲しいんだけど。」

銃の方が安全そうだけどな…？

「弾切れ怖いし反動半端ないからな。サブで持つくらいが丁度いいんさ。」

ソファでぶらぶらするイサカに2人が総ツツコミを入れる。

「お前が言うか？」

「アンタに言われたくない。」

「てへ。」

ペロつと舌を出すイサカ。

何者なんだこの人。

「刀だな。槍は今長いか重いのか無いのしか無いんだよ。」

「それでいいでしょ。どうせ我流で身につけてくものだし。」

それでええんかい。

ちよいちよいと手招きするミナモト。

「はいこれ持ってみろ。」

「えっ重っ。」

出した手に漫画で見るような刀を持たされた。

「思ってたより重い…。」

「これが1番普通なやつだよ。慣れてくれ。」

「金は私が全部出すからちゃんとした準備品出して。」

「出されなくても初めはちゃんとしてやるよ。他に薬と簡単な防具と石と…。」

ばさばさカウンターに出されていく物品にヒヤヒヤする僕。

「身につける物以外はスマホに入れておけるから。あと、イヤホンマイク持ってる？こういうの。」

と、セワリは帽子の左耳を上げて片耳イヤホンを見せた。

「家になら。」

「じゃあ今度から付けてきて。音声機能で出し入れとかよくわからない

「い悪魔の翻訳とか出来るから。」
「今時の携帯ってすごいよなあ。」
「持ち物の保管とか悪魔の翻訳出来るんだから。」

実践開始

「山手線って覚えられんよなあ。東京、神田秋葉原御徒町上野までしかわからん。」

「私高田馬場までしか覚えてない。」

ダメじゃん。

下らない話をしながら3人はゆったり悪魔に揺られながら上野公園に向かう。

武器と戦闘の基礎を僅か30分で教わっただけなのだがこんなので大丈夫なんだろうか。

そう聞いたらこう言われた。

「どうせみんなカタ無しの我流ばつかやもん。実戦でごちやごちや言うてる暇あると思うか?」

無いと思います。けどそういうことじゃない。

「そもそもスポーツどころか対人ですらないし。」

先日バイク相手に無双したの誰だっけ。

いや、あれも対人とは言わないか...? 見てないからわからない。

「上野は前言ったみたいに安全地帯やから大丈夫やよ。下手に暴れたら妖精共に死ぬまでオモチャやし。」

怖すぎる。

「まずは慣らしよ。慣らし。妖精ならいい感じに相手してくれるし制止がきくし...。」

「妖精ってどんな悪魔なんですか?」

「敬語が抜けへんねくお弟子君。セフリくらいとは言わんけどもつと碎けてええのに。」

双頭の悪魔の上にだらりとひっくり返りながら（悪魔は嫌そうだ）へらへらイサカは笑う。

「妖精ねく妖精はセフリのと会った事あるんちゃう? あの口悪ダルマ。」

「一番大事な要素が抜けてるし。」

口悪でどの悪魔か分かってしまうのが恐ろしいな。

「ジャックフロスト？」

「あれのうちよつと可愛いのがいっぱいいる…みたいなの？」

「可愛いっていうか無邪気っていうかガキ…だと表現があれだから子供っぽいというか…。」

「行きやわかるやろ。」

「適当な人ばかりだ。」

「はいとーちやく。」

ひよいと悪魔から飛び降りるとよしよしと2つの頭を撫でまわし（微妙そうな顔だ）イサカは伸びをする。

「上野は緑があつてええね。」

「緑…。」

独特の赤茶色っぽい殻に覆われた世界に木だけが現実そのままなのであろう色をしている。そう、色だけ。

はつきり言つて気持ち悪い。（頭重そうだし）なんでここだけこうなんだ。

「桜の時期はピンクになるで。」

絶対行かない。

「じゃあ、交渉と戦闘のの実践といきますか。」

「ちよつとフィールドワーク行つてくるわ。」

自由だな。あの人…。

木々の間の道を2人で歩く。

「なんにもいない…。」

「見えないだけであつちこつちでうずうずしてるよ。さて、」

入口から結構歩いたかなと思つた頃にセヲリは立ち止まって振り返る。

「では、お弟子君には今からさっきのこの公園の入り口まで来てもらいます。」

「え？」

「妖精の方には話をつけてあるからギリ容赦ある程度に相手してもらいます。仲魔を作るなりバトルするなりで私の所まで来ること。こ

れをうまく使って頑張ってきてね。」

と、セフリは僕に1000マツカとマグネタイトを渡した。

「そんなスパルタ!」

「まずは悪魔が何たるか身をもって知ってもらわなくっちゃね。魔石も傷薬も考えて使いなよ。1日経っても来なかつたら助けてあげるから。」

待って、いきなりすぎる。

何か言い返そうとしたが、セフリはふっと煙のように消えてしまった。

「うっそお...。」

自動車教習所だっ隣に乗って教えてくれるのに無茶苦茶だ。

でもまあ、うだうだ言っってはどんなレベルかは知らないがイタズラの餌食だ。

やるべき事は大まかに仲魔の確保と入口まで戻ること。戦闘はその過程で起こるというわけだろう。

今手元にあるのは武器と攻撃用の魔石(どうやって使うんだ?)、傷薬にセフリからもらった魔貨とマグネタイトこれが交渉と進行の要だ。

よし。

とりあえず来た道に戻ってみよう。

ガサガサ... くすくすと茂み(これもコーティングされていて素人の砂糖菓子みたいだ)に潜む何かが僕を煽る。

なるほど、これが妖精のイタズラか...。

歩けど歩けど全く進んだ感じがしない。

上野公園は来た回数こそ少なかれ迷うような事は今までなかったしそもそも僕は地図が読める人間なので道順通り進んで辿り着かないのは明らかにおかしい。

周りの連中をなんとかすれば通れるよ系なんだろうけどどうやって仕掛けたもんか...。

とりあえず腰に佩いていた刀を振り抜きの勢いで音のした茂みに

切り込ませる。

「わあ!？」

「なにこいつーいきなりすぎー!」

ぱっ、とふたつの影が飛び出した。

青のレオタード（レオタード着るんだ…）に赤毛、虫の羽、第一号妖精と第二妖精発見だ。

まずはどうしよう。怒ってるから交渉は無理かな…？

「もーくらえっ!」

バチバチしだした妖精の指に危険を感じぱつと飛び退る。

小さな雷撃が走ったかと思うと元いた場所には小さな黒こげが出ていた。

怖。

「よけた!」

「よけるな!」

無茶を仰る。

これ斬つちやつていいんだろうか？スツパリいって輪切りの妖精とか僕は嫌だ。

「うー!ダメだって言われてるにんげんを、黒こげにできるチャンスなのに!」

あ、ダメだ。輪切り嫌だとか言ったら死ぬ。

基礎も何もわからないので片手で振り上げた刀を第一妖精に向かって振り下ろす。

悲鳴を上げる第一妖精。アレで生きてるの!?

「いったあ…。」

「しっかりしてよ、もお。ほらー!」

第二妖精が手を掲げると第一妖精のケガ（向こうからしたら巨大な刃に斬られたろうにケガなのはなんでだ）がみるみる小さくなった。

これは大変面倒だ。

初めての仲魔

2対1の状況は精神的にとてもキツイ。

しかも相手はバチバリ言わせながらこちらを焦がそうとしつつ回復能力持ち。オマケに人間ですらないので現実味の無さでどうにかなりそうだ。

辛うじて避けて回復させないように刀を振り回せているので拮抗出来ているが普段使わない筋肉が泣き出している。どうしよう。

「もー！しねー！」

「せっかくのヒトカリのチャンスなのにーっ！」

何その怖いワード。

「君達公園内は殺し禁止じゃないの？」

「なにいつてんのこーんなチャンスみのがすわけないじゃない！『じこ』でひよっこサマナー^タにはしんだってことで。」

「王様たちにバレなきやソレで良いのよーっ！」

遵法精神を持って。

「アンタ達！いい加減にしなさいよ！」

うわ増えた。

今度は烈火の如く怒った妖精が現れる。

怒ってなかったら区別がつかないな…なんでみんなこんなそっくりなんだ。

「セヲリのお願いでやってる事を殺して返したりなんかしたら今度は何されるかわからなのよ！死にたいなら外でやりなさい！」

何したのあの人。

凄腕の有名人だと言う感じは何となく察していたけどどうにも血生臭そうな話を感じる（正当性がありそうなのがまた怖い）。

「うるっさいわね！ジャマしないでよ！」

「アンタまえからウザかったのよね。いっしょにころしてあげる！」
バチバチバチ！

怒っていた妖精に向かって電撃が放たれる。

「ちよっと、そこのあなた！」

えっ、僕？

ひよいひよいつと電撃を躲した妖精が振り返って僕に叫ぶ。

「このままだとアイツらにあなたもあたしも殺される！仲魔が欲しいんでしょ!?!なってあげるから手を貸しなさい！」

「えーっ!?!」

仲魔ってそうやって作るもんなの？これでいいの？

「もー早くして！あたしだって死にたくないんだから！」

「僕だってどうすりやいいか知らないんだよ！」

「えー何セヲリのロクでなしーっ！」

あの人強いけど先立としてはダメダメだよなあ。

「とにかく、アイツらを倒して切り抜けよう！」

「後ろから助けるから攻撃して！」

そこからはとても早かった。

「あっ！まずいかも。」

「もう遅いわよ！サマナー！右の方の守り落とすから先に倒して！」

「ええい！」

「イヤーツ！」

相手の動揺と仲魔になってくれた妖精のサポートで一気に…本当に漫画のようにこちらに流れが傾いた。

「もうやらないからゆるして！なんでもするから！」

片方がやられてしまった妖精は泣きながら懇願し始めた。

正直、虫が良すぎるが見てからは泣き喚く小さな女の子だ。

「どうするっ！」

「どうせ王様にお仕置きされちゃうんだもの。だから…。」

「スキあり！」

バチバチッ！

嘘泣きをやめて魔法を振りかぶった妖精は黒焦げになって地面に落ちた。

「こんな所だと思った。いい？サマナー。あたし達は決まりは守る方だけど口約束はしない方がいいわ。」

「だろっね…。」

これアレだ。証拠が無かったら何してもいいと思ってるやつだ。人の世界ではめちやくちや嫌われるやつだけど悪魔にもやつぱりいる・・・というかデフォルトなのかなあ・・・。

「さて、面倒なのもいなくなった事だし・・・。」

そうだ、ここにも同じのがいるじゃん。ヤバいかも。

「僕を殺す?」

「あたしをあんなバカやバカと一緒にしないでよ。約束は守らないと守って貰えない事くらいちゃんとわかってるんだから。」

さっきの2体と区別のつかない見た目の割に頭がいいな。

この妖精、マナーがしっかりしてる。

「大体、あんな事しておいて王様達にバレないわけないじゃない。サマナーは殺すより仲良くした方がよっぽど身の為よ。」

訂正。マナーじゃなくて身の振り方がしっかりしている。

「人間臭・・・。」

「ほっというてよね! 大体、気の向くまま風の向くままが妖精なんだから人の道理が通じるあたしと会えた事に感謝しなさい!」

「そんなだからああいうのに嫌われてるんだろ。」

「あたしは嫌われてなーーーい!」

何この見たことある茶番。

「もう・・・とにかく、面倒なのがいなくなったんだから早く行きましょ! 行ってセマリに文句言ってやらないと。」

ぶんすと腰に手を当てる妖精。

「この先にもまだいる?」

「いるわ。こんな感じだったしまた殺される可能性もなくはないわね。気をつけないと。でも・・・。」

「でも?」

「なんだかこの状況、女王様に遊ばれてる気がするのよね・・・。」
「まじかく。」

溜息をつきながら僕らはようやく先に進む。

凶兆を得る者

「どう思う?」

「そうね。おかしいと思うわ。」

ついて来ておいてサマナー訓練中の2人を他所にフラフラと園内を調査していたイサカ。

いつも通り何かを調べては小さなノートに書き綴っていたところ、奇妙な物に気付いた。

「空気中のマグネタイトの様子が普段の上野公園と全然違うわ。ごっそり減った上で変なものが代わりに混じってる。」

「なんか変なのが来た」感じがするなあ。お茶コップに入れて半分飲んでからジューズ入れた感じ?」

「でも妖精達は騒いでいないし協定のサマナー達もなにも言っていないかった…。『来た』だけ?」

「多分。」

「周辺のマグネタイトを変化させるような悪魔が来ただけで妖精達も何一つ騒いでないなんて…。確かに妖精達はマグネタイトの揺れにそう敏感にでなくても活動できるけれど。」

例のスマホアプリや器用なサマナー達が独自に作成した機械を暫く弄っていたイサカは立ち上がって軽く伸びをした。

「埒あかん。聞いてみよか。」

「ホ?最近おかしな悪魔がいなかったか?」

「そう。見た目とか、どこ行ったとか、詳しくなくてもええから。」
「いくらくれるホ?」

イサカはその言葉に2本指を立てた。

「足りないホ。3倍は出してもらわないと思ひ出せないホ。」
「なるほどなあ。」

じゃっこん、と先程まで背負っていた散弾銃が攻撃的な音を出す。

「ごめんな。手持ちないもんで残りは弾で払うわア。」

「ホーッ!?公園内は争い事はご法度だホー!!」

「ただの『精算』やろ。慌てんなさ。」

眉間に銃口を突き付けにこーつ、と笑うイサカに吹っ掛けた悪魔は震え上がりリヤナンシーは微笑む。

「わかった！わかったホ！教えるからヤメテ〜！」

「よし。」

ビビってくれなかったらどうしようかと思ったくと内心思いつつ銃を下ろすと悪魔はホツとした顔をして情報を話した。

「昨日今日に来た？」

「だホ。変な悪魔だなくとは思ったけど、悪魔でも人間でも協定を守ってる間はノータッチが基本だホ。あれ？それならオマエに反撃しても…。」

「追加料金？」

「なんでもないホ。」

どう見ても笑顔のサマナーがぶっ放す方が早いと見た悪魔は速攻で抵抗を諦め続きを語る。

「昼のオイラが眠たい時間に来るんだホ。この辺のマグネタイトを食って代わりに変なマグネタイトを出して帰って行くんだホ。」

「う〜ん？」

『後入れのジューズ』の謎がわかったところで首を傾げるイサカ。

「なんでマグネタイト食いに来るのに吐いて帰って行くんや？」

「そんなの知らんホ。でもアイツの出すマグネタイトは美味いからなんでもいいんだホ。」

「危機感ガツバ〜、他に知ってる事は？他に知ってる悪魔^{ヤツ}でもええで。」

「見た目はオマエみたいな感じでもうちよつと大きかったホ。で、ペかぺか光ってて…。」

「人型で光ってて？」

「それだけホ。後は他に聞くホ。」

「ふ〜ん…。」

悪魔の認識と記憶能力なんてこんな物である。

「ありがと、じゃあこれな。200マツカ。」

はいとイサカは悪魔に手渡す。

「え?くれるホ?」

「価値に対価を、悪意に銃弾を。そういう事で。」

イサカが基本的に詰めている銃弾は命中重視で鳥撃ちに使われる
散弾ペレットな上、連射可能な様に改造されているので撃たれると大変悲惨な
事になる。

本人も暴発で穴だらけになって死に掛けた経験があるが。

「あゝきな臭いきな臭い。さて...異殻の平穏な為に動きますか。」

妖精の主

結論から言うと殺意剥き出しの妖精は他にもいた。

あれから15戦くらいしたが2、3回に1度は僕のことを丸焼きや細切れにしたい気持ちを感じそうともせず襲いかかって来た。

「あゝ…無理…。」

その辺の縁石に座って刀に寄りかかってぐったりする。

「情けないわね。」

「殺し合いなんて現代の日本人は普通しないんだよ。」

しかも悪魔とだし。

こんなの週刊誌ジャンプに任せておけばいいと思う。

「それにしてもバカなこと考えてるヤツがこんなにいるなんて…。」

先程までそのバカを片っ端から感電死させていた妖精が深刻そうな顔をして考え込んでいる。

「3回に1回は来たね…。」

「そうよ。『3回に1度は必ず』来たわ。まさか…。」

ダシにされたかなあ。

流石に僕でもこれはわかる。言う事を聞かずに不満を持った妖精達を殺してもいい訓練相手に配置したんだろう。

初心者は無茶苦茶させる連中ばかりだ。もうやだ。

「まだいる?。」

「もう終わりだよ流石にこれは。」

パツと顔を上げるとセフリが呆れ顔で立っていた。

「気前がいいと思ったら肅清のダシか。あんなナリして随分臭いこと考える。」

すごく不快そうな顔だ。

無茶苦茶させてると思ったらそうでもなかったんだろうか。説明不足なのは変わりないが。

「セフリ! アンタ契約法も教えずに何やってるのよそれでも先輩なの!？」

「それは否定出来ない。」

「ほらー！こういう大事なことはしつかり教えておくものでしょ!?
ちゃんとしてよー!」

「否定できないけど妖精のくせに人間臭いヤツだな。他の妖精に嫌わ
れてそう。」

ほら言われた。

「あたしは嫌われてないって言ってるでしょー!?!」

「電撃属性の癖に何処の水柱だ。言った?」

「言った。」

というか貴女の問題も棚に上げないで。

「いきなり敵地のだ真ん中に放り出すって酷くないですか?」

「説明不足は置いとくとして上野に置き去りなんか優しい優しい。他
の連中は初めっからガキだのチンだのと戦うしかないんやから。」

フィールドワークを終了させたらしいイサカがとんでもない実態
を暴露しながら戻ってきた。

「ふーんピクシーなあ。いいヤツ仲魔にするやん。育て方次第で攻
撃、回復、支援なんでも出来る様になるで。ただし紙ツペラやから前
行かせたらすぐ死ぬで気をつけなよ。」

「ピクシーって言うんですね。」

「なんで知らないのよ。」

お前が名乗らなかつたからだよ。

「お前スマホのアナライズくらい教えろや。」

「前教えてたし自分でアプリくらい見てると思つて。」

「無理があるやろ、アンタと違うんやから。」

触つたら変なことなると思うと怖すぎて見れませんでした。

「で、なんでこんなぐつたりしとんの?」

「今?」

天才はすぐ話変わるな。

「本気で5回くらい殺されかけたからです。」

「あーねー。災難やったなお弟子君。そろそろ2年半経つからなあ。
どう扱ってもいい訓練相手として処分するなんてなー。えげつない
えげつない。」

2年半? 確か協定は3年前だった筈だ。

何があつたんだろう。

「2年半前に何があつたの?」

セフリとイサカが何か話している間にこそつとふわふわ浮いているピクシーに尋ねた。

「セフリがこっそりふざけてサマナーを黽つてた妖精達を皆殺しにしたのよ。100近くね。」

これか! さつきコイツがキレていた理由は。そりや怒るわ。

「妖精つてルールに緩いの?」

「あたしはちゃんと守ってるけど...。」

お前はどうか考えてもあの中では異端だろ。

「よく覚えときなお弟子君。人間臭いってことは平気でウソ吐くいうことやで。ですよねー!? お弟子君の訓練は終わりですよー? 出てきたらどうですー!」

「あらあら。」

「お前達には敵わんな...。」

楽しそうな女と若干悔しげな男の声でした。

「ま、まさか...。」

「まさか?」

「お弟子君セフリに拾われてラッキーやったなあ。新人サマナーがそうそう会えるような悪魔ちゃうで。アレら。」

もう自分は部外者です。という顔でイサカは欠伸をしながら言った。

「説明してもらおうか? 私は訓練を頼んだだけで肅清の手伝いをさせるとは言っていないけど。」

セフリは腕組んで大変不機嫌そうに尋ねる。

「そうは言ってもテイターニアが後から言い出した事だな...。」

「うふふ、丁度いいと思ってね。殺した分だけその子も強くなったでしょ?」

つむじ風と共に2体のえらく立派な格好と蝶みたいな羽の悪魔が現れた。

「テイターニアって、シエークスピアのアレですか？」

「そうそう、アレ。よう知つとるな。」

初めて知ったのがSAOだからあんまりいいイメージないけどね。

「上野恩賜公園・妖精王国が主^{スシ}くそ碌でもない妖精女王、テイターニアと棚上げ悪魔、妖精王オベロンってわけ。」

「酷…。」

初めて会う相手を紹介する言葉じゃないな。

ピクシーがまた怒るかと思ったが微妙な顔して何も言わなかった。

成る程。

この2体、関わりたくない。

「死んでたら私がアンタらもまとめて殺しに行つてたけど？」

「その前に私が助けるつもりだったもの。それに殺されなかつたからそれでいいでしょ？協定は今でも守られてるわ。それに、その子可愛
いしっ。」

そう言つて僕を見る目にゾワつとした。こっち見ないでください。

協定の理由

「可愛いとか不細工とか関係ないんだよ。」

謎の悪寒に震え上がった僕を背にセフリは追及を続けるがひらひらと妖精女王は言葉を躲す。埒があかない。

「イサカさん、時間ありそうなので契約の仕方教えてください。」

「まだしてないん？スマホ出して。」

イサカの指示を聞いてポチポチボタンを押すと『登録悪魔一覧』という項目に『妖精 ピクシー』が表示された。

「これでよし。スマホに入れたり出したり出来るで。ただし契約したからマグネタイトはサマナー依存や。出しとりたかったら稼ぎいよ。」

「はい。」

「やっとなー。もう。じゃ、今後ともよろしく。」

ピクシーをスマホに戻した後もセフリはまだごちやごちや言い合っている。

どうしよう。イサカに色々聞こう。

「そもそもなんで協定とかあるんですか？」

「うーんとな。前までサマナーの中で『羽狩』つちゅーのがあったわけ。」

似たようなワードさつき聞いたぞ。それ。

「妖精の羽とか髪とかワツペンとか塗るみたいな。駆け出しからいっぱいしへの腕試しみたいな感じなんやけど素材としてもそこそこええし、変態がおったもんで怖がらせて鬨って……みたいなのがあったわけよ。」

トキの乱獲みたいで生々しい。

「悪魔に対しての鬱憤払いつてのものもあるのよ。まあ、殺されまくったからなあ。それはさておき、その頃事件が起こる。メシアとガイアの大抗争や。ブンキョー・ダイトウを舞台にそれはもう暴れる暴れる。上野公園にもとんでもない被害が出たわけや。そこで出てくるのがマコトつちゅーオツサンとあそこでまーだごちやごちや言うとするセ

フリ。」

威敵がないなあ。あつても困るけど。

「ちよつとした小競り合いや1日2日のもんならオツサン共のええ酒の肴やけど現実で1月たつても終わりやせん。妖精はバタバタ死ぬしサマナー達にも大迷惑。みんな困つた所にセフリが上野公園に目エ付けたわけ。」

「どこから突つ込めば良いんですかね。」
「な。」

もう遠慮するのも馬鹿らしくなつて来た。突つ込み所が多すぎる。「こつから先は詳しくは知らんけど元々セフリは需要がなかったもんで羽狩は積極的な方じゃなかったし相手はあの口悪ダルマや。席作るのは簡単でこそないけど早かつた。マコトのオツサン抱き込んであそこの2体と大交渉。羽狩の禁止を絶対条件に協定が完成。上野公園を城にカルトをボコボコにしてようやく平和が訪れたわけ。以降、羽狩する奴はセフリにぶちのめされた後この連中の玩具にされるようになりましたとき。お仕舞い。」

びつくりするくらい利害一致の末だった。

「妖精つて聞いてももうときめけませんね。」

「ティンカー・ベルだつてウエンデイ殺そうとするもんなあ。」

なにそれ、聞きたくなかつた。

「因みに他の恩賜公園との協定は別のサマナーが聞いた話を元に付けた話。ただしルール破りの始末はセフリに任されてるから手足の甲あの槍でキリストみたいにされて公園まで引きまわされた後捨てほられるで。」

キリストみたいって何？話の流れ的にぶつ刺される感じだったけど。

「痛そうですね。」

「生きたまま食われるで。」

今日一聞きたくなかつた。

「あの人今19ですよ。当時僕より年下でそんなことしたんですか？」

「そもそも歳忘れた。おーい！何歳〜!？」

いつまでやってんのかまだまだ争っていたセフリにイサカは叫ぶ。

「あら、年上の女性の歳なんて聞いちやダメよ？」

「お前ちやうわ。」

「19の短大2。」

茶番を無視して答えるセフリ。

「お弟子君が16でよく無茶苦茶できたなって言うてるで。」

言っていないです。思っただけで。

「ああ、アレ？オツサンがいなかったら無理だったよ。私は言出屁は得意でも後に付いてくれる人がいないとどうしようもないから。」

「マコトのオツサンなあ。あの人も何なんやろな。ヤバいよな。」

「どんな人ですか？」

「最強。」

「最強ネゴシエーター。」

口を揃えるセフリとイサカ。

「あの人に勝てる人間なんか天と地が3べんひっくり返ってもないに全額賭けれるわ。」

「むしろあの方が負けるより先に天地が3回ひっくり返る方に全額賭ける。」

何で人の黒星より先に世界が3回滅びるんだよ。

ドウエイン・ジョンソンみたいなのを想像しておこう。

多分ムキムキマッチョの凄いおじさんだ。

「何想像しとるん？」

「多分蝶野みたいなのをイメージしてるんだろ。」

あながち間違っていないです。

「さて、アホな言い争い争い見るのも飽きたしやる事出来たから行くわあ。」

「何かあったの？」

「ん〜？ちよつと〜。」

適当な返事だったが妖精女王はピンと来たらしい。

「ああ、アレね。駅の方だと思っわよ？」

「マジで？ありがとうございます。じゃあ〜。」

適当な言葉だけ並べてイサカは去って行った。

「あー疲れた。私も行きますか。」

口喧嘩してただけの割に疲れた様子のセヲリは伸びびをする。

「とりあえず。」

「あー！ごめんやる事に気い取られて忘れとった〜！」

どたたたたと例の双頭の悪魔に乗ったままイサカが戻ってきた。

「何？」

「はいこれ。お弟子君にプレゼント。」

と、イサカは僕に小さな箱を渡した。

「ホイッスル？」

「サマナー必需品その5くらい？じゃ、後よろしく。」

本当に渡すだけ渡して行ってしまった。何なんだあの人。

それを見つける

異殻・ウエノ駅構内。

「ここね。」

「ここやな。」

カッーンカッーンと足音響かせながらスマホを左手にイサカは探索を開始する。

「人型で光る悪魔か… 駅中は明るいからなあ。」

異殻の住宅の照明は手動で電源を入れれないといけなが駅や街灯といった公共物は何故かいつでも着きっぱなしだ。

かつては色々調べたがどうにもよく分からなかったので千代田区がマグネタイトの一大集合地であるのと同じく認識の問題だろうと諦めた。

何年調べてもノウハウも先立も存在しない中では異殻の理解には程遠い。

「まー出来る方がおかしいんやけどさア…。」

「何が？」

「何も… 『縋って叫んで朝はない笑って転んで情けない誰のせいでもないこと誰かのせいにしたくて…』」

誰もいない構内にワンワンと歌が響く。

『僕っているのかな？』 本当はわかってるんだ…』

ヒタヒタヒタ、と中央改札の向こうにある階段から音がした。

「イサカ。」

「なんかおるな。」

ピタッ、と止まる音。

「アイツか？」

「そうね。」

「よっしや… その悪魔。お前やろ？ その公園にちよこちよこ来とるんは。」

そう言った途端、音の主はベタベタベタッ！と凄まじい勢いで階段を駆け上がった。

「あー！瞬発力どん詰まりのデットエンドやっちゅーのに逃げんなや！！」

中央改札を漫画顔負けに飛び越えると音の主を追い掛ける。

「イソラ！追っかけてちよい寝かし！」

「マカセロ。」

階段を駆け上がるまでにホームでドタガタと暫く騒がしい音が聞こえていたが、ドサツという音がして静かになった。

「私でも出来たのに…。」

「イソラの方が面積広いから逃しづらい思て。」

そう言いつつイソラに眠らされた悪魔に近づく。

「なるほど。人型で光つとるな。歩道の信号機みたい。服がえらい現代的やけど。Tシャツとジーパンかこれ？アナライズ。」

ぶつくさ言いながらアプリを起動してアナライズを開始する。

セフリは新人サマナーにしっかりと教えなかったが、アプリには悪魔の情報を解析する機能が付いており弱点や攻略法がある程度得ることが出来る。

戦闘中に中々扱えたものでは無いが、知っていれば戦闘は格段に楽になるはずだった。

「何やこれ？」

何度試しても悪魔として認識されない。

「リヤナンシー。まさかとは思うけどこいつ、悪魔か？」

「さあ。少なくともマグネタイトを摂取しているのは確かだけど。」

「…マグネタイト吐いたとも言ったよな？一つ思たんやけど、コイツ、作ってない？マグネタイト。」

悪魔はマグネタイトを貯蔵したり消費することはできても生産することは出来ない。

公園で聞いた『妙なマグネタイトを吐き出していた』理由が一つの可能性を生み出していた。

「確かに。この悪魔、マグネタイトを自分で作ってるわ。でもそんなの…。」

「じゃあ上野に来てんのは足りなくなっただけの補給か？でも吐いてるし……貯めんのが下手なんか？」

「イサカ、チガウ。」

「ん？」

ぐるぐると回っていたイソラが妙な方向に行きかけたイサカを引き戻す。

「マグネタイト、作レル悪魔ハ存在シナイ。」

「そうやん…… そうやん！ヤバいやつ！」

可能性にぶち当たってとんでも無いことに気づいたイサカはイソラに謎の悪魔を運ばせると慌ただしく動き始めた。

頻発の衝突

「今度の時はもうちょっと計画性のあるやつにして欲しいですね。」
「まだ言う……？」

只今現実時間およそ12時。行きと同じくセヲリの悪魔の背に揺られてアラカワの武器屋に向かつて行く。

疲れてウトウトしたいところだが乗っているのが車ではなく悪魔（鞍や鎧なんて素敵なものはない）なのでそんなふざけた真似をすればいろんな意味で即落ちする。

セヲリは横乗りでブランブラン足を振る余裕だが。僕も早く慣れたい。

「次は乗れる悪魔探ししないとね。私抜きでも動いてほしいし。いると移動速度が段^{ダン}違いだからね。」

「そんな見つかるもので？」

「武器とか戦い方とかすり合わせて行かないといけないけど意外というよぉ？井の頭とかに。」

悪魔の活動地域やなんやかんやを聞きながら歩いていくと前方から二人の人物が手を振りながら現れた。

「おーい！セヲリー！」

僕と同じ年くらいの男女だった。

顔立ちが似ているのできょうだいかもしれない。

「よー！セヲリお疲れーそいつが新しい奴？俺と同じ年くらいじゃんやったねー俺……。」

「早いわお前。」

矢継ぎ早な少年にセヲリは馬上（悪魔だが）から踵を落とす。

ゴン、と鈍い音がして少年は頭を抱えて蹲った。

「おお……。」

そんな少年を足で僕に示してセヲリは紹介する。

「このバカはジョバンニ。で、あっちは双子の妹のアリス。」

アリスは知らないがジョバンニの名前はゆうべチラツと聞いた気がする。

セフリとは結構親しいんだろう。踵落とし食らっていたし。

「よろしくー。」

「よろしく…。。」

手を振って自己紹介をする。

僕の顔引き攣ってないだろうか。

「ねね、もう仲魔はいる？武器屋でメンテとかして時間あったら一緒に行かない？。」

「どこ行くつもり？。」

「アラカワ遊園！。」

「本当は昨日行くつもりだったけどごちゃごちゃしたからさ、俺たちいるし大丈夫だろう？。」

「ふーんいいんじゃない？…。どうする？この2人ならそこそこ強いし私いなくても行けるよ。バカだけど。」

バカだけど。

「ひっでー！。」

「自分が短大行ってるからって人を小馬鹿にするー！暴言ハンターイ！」

「うるせーだったら化学反応式くらいちゃん覚えて点数取ってこい30点コンビ。」

「英語は85点取ったもん！。」

「部活は優勝したしー！50m9秒切れないくせにー！」
どいつもこいつもひどい。

が、僕としては同い年くらいの子と一緒に色々できるのは嬉しい。
行くと返事をしようとした時、ブロロロロロ…。とエンジン音が遠くから聞こえてきた。

セフリ、ジヨバンニ、アリス3人の顔が揃って険しくなる。

「エンジン…。!?。」

「まさか、ガイア!?嘘でしょ?!こんなすぐにまた!。」

「また遊園地には行けなさそうだな。降りて。」

「え!。」

ぺっ、とセフリは僕を落馬させる勢いで降ろすと背負っていた槍を

持ち直し音の方向を探らんと首を伸ばした。

セヲリの悪魔……ジードは背になっていると2階に届かんばかりの高さになる。

暫く目を細めていたが、げっ、という音がセヲリの喉から出た。

「燃えてるし先頭のバイク。どう見ても悪魔だ。しかも2ケツ。合わせて5台。」

「悪魔ってバイク乗れるの?」

「馬や戦車乗ってる奴いるくらいだからバイクくらいあるってことでしょ。2人とも、私の弟子任せるから一緒に始末しておいて。」

「デビューその日に対人戦やらせるの?キツくない?」

既に自分の獲物らしき鈍器をブンブン振り回しながら眉間に皺を寄せるアリス。殺る気充分と言った感じだ。

「アンタらの悪魔じゃ2ケツは無理だしこのまま私になってたら道路で粗挽きミンチよ?仕方ないでしょ。ほら来た!」

セヲリを乗せたジードは一瞬で僕らの前に飛び出たと思うとバイクからの攻撃を弾いた。

「チッ。」

舌打ちが聞こえる。

ガキンガキンと攻撃を弾かれながら駆け抜けていくバイクから4つの影が飛び降りた。

バイクの後ろに乗っていた連中らしい。ギラギラとした視線がメット越しにでも感じられる。

「早く追っかけろよ!」

えらく刃の厚い刀(カッタラス?)をブンと風切音を立てて構えながら叫ぶジヨバンニ。

「わかってるってーの!!」

負けじと叫び返したセヲリはワープと思えるほどの速さでバイクを追って行った。

四字を持つ戦士達

「真夜中にバイクと武器ってソルジャーかってーの……。」

ポケットから取り出した笛を何度も吹きながらセリりはぼやく。

アラカワには首都高への入り口がないのでバイクとの殴り合いは他のサマナー達もいる一般道だ。

避ける気も避ける暇もない連中がF1じみた速さで走るので轢かれた相手は普通に襲われるより悲惨な目に遭う。危険勧告は重要だ。

そのおかげかもう道には人影ひとつなく彼女が存分に槍を振るう舞台が整った。

「順番待ちは無しだ。かかってきな。」

カタカタカタ……！と彼女の死角からラフィン・スカルが飛びかかる。

が、振り返りもせずには槍を無造作に後ろに向かって振った。

吸い込まれるように石突が眉間にヒット。ガン！と音がしてラフィン・スカルは落下した。

「オオッ！」

降ってくる武器をひよいひよいと人馬一体（馬ではない）の動きで躲して代わりに槍の柄を相手の胴に叩き込む。

見た目からはありえない剛力をくらってぐらついたバイクに更に突き込むと痛みと横からの力でバランスを完全に失い転倒。

ついでに後続車を一台巻き込んで後ろに見えなくなった。

それを確認すると残りの敵を疑問の目で睨む。

「随分今日は大人しいな……。」

普段ならば我先に悪魔を呼び出したと思ったら殴りかかり体当たりかましで誰が敵かわかっているのかと言いたくなるような過激さなのに今日は様子見ばかりだ。疑問には感じるし普段の鬱憤と放り出して来た弟子を思うと腹は立つ。

「そんなこと言わないでよーみんな緊張してるんだから。」

「はっ。」

先頭を走っていたバイクの悪魔がセリリとスピードを合わせると

横に並んだ。

後ろに乗っていた人物がヘルメットを外す。

「やんちゃ顔の女の子と言った容姿の人物が猫を思わせる笑顔でセフリを見ていた。」

「やーどーも。私率先垂範そつせんすいはん！陳勝呉広ちんしょうくわうってあんただよねー？」

「いや知らねーよ。」

嫌そうに顔を歪めて答えつつセフリの警戒心が急上昇する。

「今まで自分から口を聞いてくるガイア教徒とは会ったことがない（だから陳勝呉広とか言われてもわからない。）ので対応法がわからない。」

『ただ絶対油断するべきではないんだらうな…。他と同じにするとヤバそう。』

ピュツと唐突に突きを頭に入れてみると綺麗な動きで躲かれた。

「人の話聞いている時は黙って聞けって言われなかった？」

「殺し合いする相手と話し合うタイプじゃないんで。」

逆にジヨバンニやミナモトあたりは喋ってるのか殺し合うのかわからないくらい喋っているのですちらにお願いしたいと内心呟く。

「もー、じゃあ六陣氷神ならいーい？」

「そのイタいのよく使えるな…。」

六陣氷神はある時から急に現れたセフリの二つ名だ。

字の並びがかなり特殊（そして大変イタイタしい）なので余程彼女を恐れているか情報でしか知らないサマナーくらいしか呼んでいないし急に定着した名付け親不明の二つ名は本人からしたら薄気味悪くしか感じない。

「てかガイア教でも知られてんの？」

「羨ましいのよー…。四字を2つも持てる九字の者…。貰えるなら私も欲しいわー…。。」

「私のをあげたいよ…。」

恍惚そうな顔で呟く率先垂範にドン引きしながらジードに指示を出して彼女のすぐ後ろに着く。

もう他の暴走族は蚊帳の外だ。

「食えージードー！」

率先垂範ごと噛み砕かせようと飛びかかる。が、私の話終わってないってば。」

バイクの悪魔はスルリとすり抜けてしまう。

「あのねー私達探し物してるの。くれるか協力してくれたらこんな風に襲いにくるのとおんなじ感じにしなくていいんだけど… 手伝ってくんない?！」

「バカだホ。」

いつの間にかセフリの後ろに乗っていたジャックフロストが言った。

まんまるボディで今にも滑り落ちそうなのに当の本人(?)はまるで電車の席に座っているようにゆったりしている。

「サマナー襲いながら探し物してるどっちつかずのぱっぱらぱーになってセフリが手オイラ達がを貸さないといけないんだホ。」

「どこでぱっぱらぱーなんて覚えたの?！」

「襲われる方が悪いと思うんだけどやっぱサマナー相手じゃそうなるー?じゃあ実力行使で。」

そう言った途端、率先垂範の乗っていた悪魔の気配が変わった。

主を絞め殺す

『本当にそんなのいたのか?』

電話からヒロの厳しい声がする。

「アンタにそんなウソついたら携帯潰されるやろ。」

腰に手を置いて若干苛つきながらイサカは答えた。

ヒロの二つ名は『技師』。

悪魔と『COMP』の解析の他、悪魔の合体・強化を司る『邪教の館』の管理運営を行う唯一無二の人材だ。

ふざけるのは大好きだが人を傷つけたり軽視する言動が嫌いでも本気で怒らせるとアプリや邪教の館の機能を潰して来る。

また、高い実力にも関わらずとある理由から表に出てくることは少ない。

『まるでオレじゃなかったらやるみたいない言い方だな。』

「心配せんでも自己保身の為しかウソは付かんから。」

『最低じゃねーか。』

「そんなこと言うとするヒマちゃうねん。ウソ言うからもっぺん言うんで? 『人が改造されたと見られる悪魔を発見』。連れてくから色々準備しといて。」

『わかったけど大丈夫か?』というか本当に改造なんてあるのかね? サマナーがポカしてそうだったとかじゃねーよな?』

「イサカのことわからないサマナーなんているの? 一人で歌いながら歩き回ってる人間なんてそういないでしょう。」

リヤナンシーの言う通り歌うというのは人だけでなく悪魔にも居場所を知らせる事になるため、一人でこれをやるのは実力と胆力が必要になる。

「まあこっちは顔のわかるサマナーなんておらんけど。」

ケタケタ笑うイサカ、実は他人の顔認識が出来ていない。声と会話の内容で人を区別している。名前覚えもかなり悪い。

『お前の顔認識はもう失認だろ。』

「これと寝汚さだけは医者に匙投げられたからな。で、改造の根拠や

けどこれはまア文献参照ってとこやな。昔分捕った資料にこういうのあった。この世のもんやないような言語やったせいで今でも碌に読めてへんくていくらか翻訳あったから辛うじて分かるくらいやけど。あと捕まえたのはとりあえず寝かして親指結束で締めといた。起こして暴れたらもつかい寝かす。」

『相変わらずの万能倉庫っぷりだけど容量いくつ使ってんだ?』

COMPアプリにはサマナーの荷物を情報化するアイテムストレージ機能があるが魔貨とマグネタイト以外はスマホの容量を使用する。

因みに、このアプリのデフォルトサイズは2Gもない。

そして平均使用量は精々10Gである。意外とコストパフォーマンスが良い。

「25くらい。」

『馬鹿じゃねーの?…で?資料の出処は?』

「ガイア教。」

長い溜息が電話越しに聞こえた。

『面倒になりそうだな。』

「ホンマやで。じゃあよろしく。さて起こそかあ。」

電話を切るや否や薬を取り出す。

「あ、先行資料で写真だけ送っとくかあ。肖像権働くかな?」

と、薬をポケットに突っ込んで着ていた服(上半身)をペロツと剥くとパシヤパシヤとシャツターを切る。

「囚人みたいな格好してんな…。うーん絶縁破壊された時みたい。」

所謂リヒテンベルク図形によく似た模様が全身で薄く発光している。

人間は勿論、これまで見てきた悪魔とも全く違う特徴だ。

また、イサカの顔認識では判明していなかったがこの稀人はイサカと大して歳の変わらない青年だった。

「植物に絞め殺されてるみたいね。」

「植物かあ…。改造人間も人造半魔も悪魔もアレやからとりあえず

『ユンガブラ』かな。」

しれっと便宜名をつけて写真を送りつけるとポケットから再び薬を取り出してぺっ、とユンガブラに使った。

気付薬とは比べ物にならない効力で起こされたユンガブラはビクン、と体を震わせて目を開いた。

「!?」

「よお。」

焦って縛られたことに気づかないまま立ち上がって逃げ出そうとした途端ユンガブラは頭から転んだ。

「まあこうなるかあ。」

「もうちよつと穏やかに出来ないの?」

「交渉より説明派なんで。」

シヨットガンを背負い直すと明らかに怯え切った相手に溜息をつけてイサカは腕を掴んで助け起こす。

「もう話聞かんと逃げられると困るもんで縛らせて貰たんさ。無理に取ろうとすると親指千切れんで。」

「… 僕を連れ戻しに来たのか。」

「生憎人と悪魔こねくり回す程倫理観捨ててなくてな。イサカや。こつちはリヤナンシー。アンタ、サマナーちゃうやろ?」

予想アタリくと内心想いつつ出来る限り穏便に質問と説明を続けていく。

軽快な（軽薄とも言う）西の言葉にやや眉を顰めながらユンガブラは言葉を返す。

「サマナー?」

対話の姿勢を見せた相手にイサカは内心ニヤリ。

「そう。このリヤナンシーみたいな悪魔を使役つて言うつと響悪いけど色々やつとる人間でな、アンタが予想しとる連中とはうくん敵対しとつて妙な話聞いたからやつて来たつちゅーわけ。そこの公園でちよいちよい見かけた変なマグネタイト撒く悪魔つてアンタやろ?」

「… 僕は悪魔じゃない。」

「公園の連中がそう言ったただけやでわかつとうから安心しいや。で、本題。アンタそのままここで引き籠もれんのわかるやろ？この辺は人よお来るしガイアーズも少ないけど現実世界に比べりや危なて危なて碌でもないことあらせんし何より家帰りたない？くそカルトガイアーズから守るしアンタのそれ治す方法探すから一緒に来てくれん？無理言わせたないねん。」

「…嫌って言ったら？」

「無理言わせたないねん。」

にこりとイサカは微笑むが目は一切笑っていないかった。

「拒否権ないじゃないか。」

「そら敵のムチャクチャ見かけてほつとくなんて土台無理な話やろ。それにそのままやと見つからんでも死ぬで？さつきも言うたけど引き籠もれるようなとこちやうねん。ほら回れ右。」

ぐるつとユンガブラを半回転させると親指を括っていた結束バンドを外す。

「もう専門家に話をつけてあんねん。ほら行くで。」

くいくいと促してイサカは歩き出す。

ユンガブラはやや不安げな顔をしたが覚悟を決めると背中を追った。

脱兎を追うのは

「どこへ行くんだ？」

上野駅から出たユンガブラは前を歩いてきたイサカに尋ねる。

「ネリマのヒカリガオカ。あそこの団地にヒロっていう悪魔のこと色々調べとるヤツがおるん。オルトロス！」

『アオーン!!』

遠吠えにこの野郎ワザとだなと半目になるイサカとその後ろでひっくり返るユンガブラ。

「何？これ…？」

「仲魔。リヤナンシーと大体同じ。」

「この頭が2つもあるのに碌に頭の働かない馬鹿犬と同じにしないでくれる？」

「ごめんな。」

貶しっぱなしに唸り出したオルトロスをイサカははたと『伏せ』のポーズをさせてユンガブラに手を差し出した。

「まさか乗っていくのか？」

「ここからヒカリガオカまで歩いたら半日かかるて。ほら痛がらんから鬘東京湾しつかり持って前乗って。オルトロス、今日巫山戯たら湾沈めるからな。」

因みにこのオルトロス、前科3犯の凶悪犯である。

「よし行くでー。」

事前の忠告から感じられた危機感とは裏腹に穏やかにオルトロスは走り始めた。

「このペースやと50分くらいかな〜なんにもない、とい、い…。」

そうは言ってもやや衰弱しているユンガブラに配慮してゆつたりと走らせていたイサカは笛の音に顔を上げた。

「笛？」

「他のサマナーの笛や。あんだけ鳴らしとるってことはガイアーズがまた出たか。しかも高速に上がらん場所…アラカワやな。マズイ

かも。」

流石に昨日今日暴走族が現れたのはユンガブラを探していることに気が付いている。

「昨日今日って上野の悪魔言うと思ったからまあまあ辻褃合うわな。オルトロス、気をつけながら行くで。」

見つかったらスピードの出せない今、間違いなく追いつかれる。

イサカは普段であれば暴走族に対抗できないわけでは無いが武器の圧倒的なリーチと操縦能力で追い回すのが常だ。追われたことはまず無い。

ブンキョーを出てトヨシマに入ろうとした頃、嫌な音が後ろから聞こえて来た。

「見つかった!」

舌打ちをして前のユンガブラの耳に障らないように笛を吹いた。

先程よりもやや高い笛の音が街中に響く。

「まだアンタつてことはこの遠目じゃ気付いてない... と思いたいな。」

2人とも振り落とされないように後ろからしっかりと腕と内腿に力を入れて走らせる。

恐らく目標を探すための装置なりなんなりあるであろう。

捕まったら自分は間違いなく殺されるしユンガブラはどうなるかわかったものではない。

「絶対喋らんと手放すなよ!」

スマホを落馬しない内に素早く操作して雷撃の魔石を取り出すと後ろへ向かって投げつけた。

バリバリバリ! 後ろからの衝撃と閃光が発動を知らせる。

しかし、バイクの機械音は止まらない。

確実に近づいて来ているのを感じる。

「ポンプアクションこういう時不便やで!」

イサカの銃は昔の映画の様に片手では撃てない(そもそも片手で撃つものではない)構造になっているのでいまいち決定打が与えられな

い。

「ヤバい……！」

腹決めて轢かれる前に撃とうかと思った時、漸くツキはやって来た。

「なにしてんのお前。」

すれ違いざまにボソリと呟くと走って来ていたバイクの運転手1人の首を一瞬で掻き切った。

「ラッキーやわ。アイツ来るとは。」

「あの人は？」

『騎兵』。1番器用に悪魔に乗れるやつやで。」

「ケルピー反転！」

素早く身を返すと今度はバイクを追いかけ始める。

2メートル半はある槍で相手の武器を危なげなく弾くとまたスパリと首を刈ってしまいあつという間に片付けてしまった。

「くたばってる。」

手をはたきながらとても文面に表せない罵声を2、3吐き捨て火炎の魔石で暴走族の死体を骨まで焼き捨てる。2人に視線を移す。

「よオイサカ。俺の名前覚えてる？」

「ハから始まったことしか覚えてない。騎兵。うん3ヶ月ぶりくらい？あと今こんばんは。」

「ハヤトな。あと3月の末に会ってる。随分賑やかだったけどそいつ何？」

「お前ガイアーズ嫌い過ぎて面倒くさいから教えたくない。」

先程の様子からされる通りハヤトは異殻最強の騎乗能力を持つが同時に誰よりもガイア教が嫌いである。

理由は答えることがないので誰も知らない。

「うるせー奇天烈学者。とっとと吐けや。」

馬上でブンブンと槍を振り回しながら不機嫌そうに迫る。

「じゃあ説明すつから護衛して？ヒカリガオカまで。」

「技師案件かよ……わかったから俺にも一枚噛ませろよ。」

「まあ頑張るわあ。」

死中の活を獲る

「ヒャーッ!!ようやくか!待ちかねたぜ!!」

とてつもない威圧感を放ちながらぐるんところらを振り向いたバイクの悪魔。

その顔には肉がなく、髑髏がこちらを見つめていた。

「まさか…。」

「私の最高の相棒!『魔人』ヘルズエンジェル!さて、私たちを満足させられる?」

どっと背中に汗が流れるのをセヲリは感じた。

髑髏頭の人型悪魔、それらは全て『魔人』という分類に属している。わからないことだらけの悪魔の中でも一際変わった存在で、命懸けで調査をした学者―イサカによれば『人』と『死』に関連する存在だということらしい。

そして命懸けでという事は恐しく強いという事だ。

「なんで魔人なんかガイアーズについてんだ!」

「細かいこと気にしていると死んじゃうよ!?!」

ぶおん、と耳元をタイヤが掠めた。

「あぶねっ!クラウドか世良か!?!」

「反撃だホ。」

「わかってるって!」

ピキ、と短槍の穂先が音を立てた。

サマナー達はどれだけ悪魔を倒してマグナタイトを保有しても人間である限り魔法は使えない。

が、武器は別だ。サマナー達の使用する武器は悪魔と合体させたり特殊な素材を組み込むことで高い威力や擬似的な魔法を発揮する。

そして六陣氷神。この小っ恥ずかしい名で注目すべきは3つ目の氷の字。

これはセヲリの使用する属性を示している。

セヲリの武器は血も涙も凍らせる氷結の槍だ。

「やつと本気出してくれた〜!」

「殺す。」

「行くぜエ〜!!」

パギ!と耳につく音がしてセヲリの短槍と率先垂範の柄の長いメイスがぶつかった。

「おっ…もっ…!」

騎乗するセヲりは重心がブレ易い。

対して率先垂範は多少揺れはするが悪魔が乗りこなすバイクだ。

そして武器は重さをそのまま威力にする鈍器であり、突く・払うを基本とする槍とのぶつけ合いには圧倒的に彼女が有利だった。

『こりや状況悪すぎるわ。何処かで逃げないと本気で死ぬ。でも相手は魔人のバイク…。』

しかもまだ2台の手下が残っている。死ぬ気で逃走妨害をしてくるだろう。

なんだか打ち合いが続いて突き返すがこれはまたバイクが器用に避けてしまった。しかもそのままタイヤの回し蹴りが飛んでくる。

「ぐうっ。」

無理矢理体を反らせて躲すがその間に連携攻撃が飛んでくる。

「フロスト!」

「ホ。」

広域氷結マハブフが両者に無理矢理距離を作る。

このままバイクのどっか凍りつかないかなと願っていたが燃えたタイヤにあつという間に溶けてしまった。

「そうそうそういう小技がいいのよ!私達じゃそうはいかないもの!」

率先垂範はこちらが不利でジリジリと削られているのをわかって大変楽しげだ。

命懸けで逃げに転じようかというところでセヲリにも悪運は回ってきたらしい。

「え?!見つかって!?」

唐突に右耳を押さえて率先垂範は叫ぶ。

「どうやら何か連絡があったらしい。」

「でも私今…はい。わかった。ちえっ。」

拗ねた様に通信を切ると若干不満気にこそこそつとヘルズエンジェルに囁いた。

「ごめんね陳勝呉広。呼ばれちゃって行かないや行けないの。また遊んでくれるよね?」

「2度と来んな。」

「バイバイ。」

くるつと向きを変えると部下を引き連れてあつという間に行ってしまった。

「勝手だホ。」

「まあ、悔しいし何してたかわからないけど死なずに済んだから良しとしておこう。」

ジードのスピードを緩めて去っていった方向を見る。

そして、はく、と溜息をついて呟いた。

「片付けてあいつんところ行く。」

『ガンー!』

「ぐうう…!」

降ってくる鈍器を刀で受け止める。

重い。妖精達はひらひらふらふらしながら不意に魔法を飛ばしてきたけれどこいつらは殴れるところがないか殴って来る。

とにかく怖いので受け止めることしかできてない。

「私のサマナーに何してくれてるの!!」

バチバチバチ!と、ピクシーの電撃が相手の右腕に当たってノックバック。続けて脳天に直撃した電撃で頭からひっくり返ってしまった。

「とどめ!今!」

「うっ。」

とどめと言うことは殺すという事だ。

襲ってくる彼等が会話ができる様な相手ではない事はわかってる。でも、僕には無理だ。

尻込みする僕の顔に妙に温い液体が飛んできた。

「やべ、飛んだ。」

見るとジョバンニの足元には既に2人の敵が真っ赤な水溜りの上で寝ていた。

いや、これは僕の認識がおかしい。バグってる。

ジョバンニに殺されて自分達の血溜まりに倒れているんだ。

今まで画面や紙の向こうにしかなかった光景に視界がぐらぐらする。

「やべ、こいつ貧血起こしてる。」

「今!?ウソでしょ!?!」

ぐしや、と音がしてピクシーが伸した敵の頭から血が噴き出した。アリスがとどめを刺したらしい。ぽたぽた武器から血が垂れている。

2人とも武器を振って手早く血を落とすと僕の方に駆けてきた。

「ちよつと大丈夫?」

「これお前より酷いぜ?武器屋近いからあそこで...。」

ジョバンニが僕に肩を貸して1歩歩こうとした時、分厚い氷の壁が僕達を包囲する。

ガツン!ドスツ、ドサ、という音が壁の外から聞こえて、

「ちゃんと死んだのを確認しないと危ないって9Sが出会い頭に言ってるんだろ。」

というセヲリの不機嫌そうな声がした。

異を覗く――1

「ヒローッ!」

「イサカうるさいなんだお前。」

玄関を蹴飛ばすような勢いで開いた所に転がり込む音と声を奥の部屋で聞いたヒロはキーボードを叩く手も止めずに叫び返した。

「あ、失礼しまーす。」

「なんで挨拶だけは律儀なんだよ。」

「ばあちゃん厳しいから。」

ガタガタと音がして3人がヒロのいる部屋までやってきた。

ユンガブラはともかく、3人ともどこか草臥れた様子だ。

「お前も来たのか。」

「途中クソバイクに追い回されてたからな。」

「早速か、どうりで草臥れてるわけだな。で、そっちが例の?」

異形の青年に興味も恐怖も見せない医者のような顔で指差すヒロにイサカは頷いた。

「オレはヒロ。悪魔と情報の調査をしてる。元に戻せるよう出来る限りのことはさせてもらうから。よろしく。なんて呼べばいい?」

「あだ名でもええで。」

勝手知ったる他人の家と床に座り込んだイサカが2人の下から呟く。

「お前が聞いとく事なんだよ。」

チクチクと攻める声に耳を塞いで知らん顔のイサカ。

異殻一の学者も開いてみればとんでもないろくでなしである。

「イ… イスカです。よろしく…。」

「…で、俺も聞かされてないんだけどソイツ、何? ガイアーズに関係してるんだろ?」

「説明するからとりあえず仕事してくれん?」

早く暴れたそうなハヤトを抑えつけてイサカは言ったら。

「な〜る〜? 確かにマグネタイト生成してるし外見はどう見ても人間

だが反応は狂ってるしこの線と目は人間じゃないな。」

説明を聞きながらユンガブラーイスカを調べてはキーボードを叩いていたヒロは呟く。

「バサツと言いやがった。」

「オブラートがない。」

「お前が言うな。」

「お前が言うなお前が。」

戻ってきたブーメランに胡座をかいていたイサカは仰反る。

仰け反りすぎて床に頭をぶつける様子を見てハヤトはバカじゃねえのと呟いた。

「しかもまたセンスあるのかわからん名称つけて…。」

「まあ、駅で見つけて追いかけられながら連れてきたってだけやからあとはそちらからきいて。」

「…この人の名前は？」

「一字違い？」

「……………」

どうにも締まらないイサカを見て溜息を吐いたヒロは質問を開始した。

「ここに… いや、攫われたのはいつかわかるか？そしてそれは何処だ？」

「ゴールデンウィークの最終日だったと思います。代々木公園駅の側で友達と別れて歩いてて気づいたら暗い部屋に転がされてました。」

「渋谷じゃん。」

出張して来たのかよ。と呟くハヤトにまア目と鼻やもんな、と返すイサカ。いつの間にかレポート用紙数枚とボールペンを取り出してつらつらと何か書いている。

「じゃあ、『何』があつたか聞いていいか？そしてどうやってウエノまで逃げて来たかも。」

「…連れられて来て半日位した頃だと思えます。急に扉が開いて地下みたいなところに連れてかれて… あれは多分病院の手術室でし

た。」

「新宿は病院多いぞお…。」

新宿区は東京3位の病床数を誇る自治体であり、大きな病院自体もかなり多い。

これからの苦労を考えてイサカは颯めっ面。

「僕以外にも何人が連れてこられた人がいました。そこで…。」

ぐっ、とその時を思い出したのかイサカは黙り込んだ。

しばらくイサカのペンの音のみが響く。

「気味の悪いヒルみたいでした。瓶のなかで僕らの方に向かってうごくぞ動いてて…それを…。」

「ヒルか…。」

その後を察してか察さずかイサカはペンを止めて呟いた。

「心当たりあるか？イサカ。」

「大分違うけどカミキリムシみたいなクワガタみたいな頭のイモムシみたいななんが例の資料と一緒にぶんどったやつに描いてあった。それかもしれない。続きも教えて。聞こえとるから。」

そう言っ立ち上がって隣の部屋に行くとガチャガチャと勝手にコピー機をいじり始めた。

異を覗く―2

「…その後はまた気絶しててどれだけ経ってたかわかりません。とにかく全身が痛くて考える暇もありませんでした。だから暫く経った頃としか言えませんが、僕にも、周りの人にも『それ』は発生しました。」

ガチャガチャピーガシヤンガシヤンと隣の部屋から聞こえる騒がしい音が再び言葉の間を支配する。

「僕はかなりマシな方でした。痛みがひどくなった場所が出来たと思ったらコイツが出て来たんです。」

と、のたうった線の浮いた右腕を持ち上げる。

明るい室内でも瞬くように光るそれはただの刺青や落書きとは違うことをひしひしと感じさせた。

「マシっていうが他の連中はどうなったんだ？」

「それは…。」

「T―ウィルスって知つとる？」

調整作業を終えたイサカが唐突に尋ねた。

「は…。」

何言い出した？コイツ。という顔でハヤトはイサカを見る。

「別にGでもAでもウロボロスでもええんやけどまあご存知バイヨ… B I O H A Z A R D に出てくるウィルス。あれ、ゾンビになるイメージが強いけど元々何か知つとる？」

「バカにしてんの？」

「フィクションを交えてわかりやすい説明にしようと欲しいな。あれ、生物兵器作るための材料なわけよ。10人に9人は感染すればゾンビ、後1人は抗体持ちで感染耐性持ち、そいで、1000万人に1人はウィルスを制御しきって優れた身体構造に変えてしまう。わかった？」

「…コイツが10人か1000万人に1人で後は10人中の9人って

ことか。」

イサカがイスカの話を戯けたような喩え遮った理由に気付いたハヤトの瞳に怒りが宿る。

「まあこの人も弾いたわけでも完全に適合してるわけでもなさそうやしあくまでそれまでの手持ちとガイア教が態々人攫つてやってるって事を統合して出したヤマ勘やけどな。遊んだ事ないし。」

「ないのかよ。」

「あ、コピー終わった。」

どこまで本気かわからない口調で言いたい事だけ言うとコピー機の方に戻っていく。

「そういう事か？」

尋ねるヒロ。何も言わずに頷くイスカ。

「…人の形じゃなかった。5人はいたのに正気…正気というかわからないけど正気だったのは僕以外いませんでした。意味がわからなくて怖くてそれから暫くまたあんまり覚えてません。痛みや怠さを感じましたが空腹とか、水が欲しいとかはなかったです。いや…空腹…みたいなのはあったんですけど…。」

「学者ー。」

「マグネタイト補給とちやう？病院なら少なからず人は集まるから供給はそんな難しくないやろしそもそも人間やから光合成みたいにできるやろ。あの虚数マグネタイトは気になるけど…ウエノ来てたのはその方が楽やからちやう？」

ガタガタとどこからか持ってきた簡易テーブルを2つ並べながら疑問に仮説を重ねるイサカ。そのままコピーして来た紙を並べるとまた何か書き始めた。

「逃げられたのは本当に運です。あんな状態になってたのに逃げる意思も気力もあつた理由もわかりません。足音がして扉が開いた所を突っ込むように飛び出して地下から飛び出しました。エントランスには人や悪魔…？悪魔もいたんですがそれもどうやってか振り切つて…。あとはさつき話してもらった通りです。」

「言葉通り火事場の馬鹿力だな。」

「^半ユンガブラの能力かもしれない。ウエノまで来たのはだいぶ凄いけど。．．．人攫ってやっとなるんやでコレ相当不味い話やで。ヘタこいたらオールドエイジに突っ込まれるどころか警察だなんだの大騒ぎや。けど、ゴールドエンウィーク末からならまだ何が狙いか知らんがまだ始まって2、3日や。」

「2、3日!?!」

「この世界は現実世界より時間の流れが早いんだ。今は大体向こう1日で5日くらいだ。長い間随分頑張ったな。」

愕然とするイスカにヒロは説明し、労う。

「犠牲者はなくせんけど今なら片せばかなり減らせる。．．．いや、倫理とかそんなん置いてても時期的に早く片さんとマズイな。」

「何?」

「今年何あるかわかるか?．．．オリンピックや。人がアホみたいに集まって来る。年齢性別なんなら国籍までよりどりみどり、それこそヘタこいたら入れ食いで連れてかれる。一步違えば国際問題やぞ。」

「イスカ、どこの病院に連れて行かれたかわかるか?イサカ。」

「もうできる。．．．よっしゃ。」

先程からイサカが書いていたのはA4紙4枚から構成された新宿区の地図からの病院のピックアップだ。病院の地図記号が赤い丸で囲まれている。

「縄張り差し引いてもウエノまで来れるちゅー事はブンキョーとの境周辺や。チヨダなんか通れたもんじゃないしミナトは遠回りすぎる。精々トヨシマか。」

「それでもって手術室。．．．外科があつて人を何人もぶち込める病室がある。．．．みたいな感じか。意外と絞れるな。」

「やからこの辺のハズや。」

ぐるぐると怪しい病院を指で示す。

「絞れたが直接確かめるには手間だな。どうする?」

「ヤマトにガイア教の息が掛かった病院とか聞けないか?そういうの

も調べてるだろ？」

「その手があった。」

パン、とイサカは手を打つ。

「どうせこうなった時点で巻き込み確定や。善は急ぐで。」

第一次半魔王工場襲撃作戦――1 戦前

「まさかお前ら今から殴り込む気か？」

ヤマトの返信待ちの間にガサゴソと準備を始めたイサカとハヤトに呆れ顔のヒロは尋ねる。

「勿論。」

「そら、まア、他にも人おるっばいし？ラツキー言っても1人逃げれるくらいの相手なら2人で上等やろ。後始末はともかく。」

と、武器の手入れをしつつ持ち物確認をするハヤトと帽子とカバ―ゴーグル、そしてアイスピックの様な短剣を装備するイサカ。

「ともかくじゃないんだわ。被験…被害者の回収と奴等の始末にデータ回収にどんだけ手間かかるか知ってんだろ。」

何事も始める前より終わった後の方が手間が多いのは異殻でも…ましてや敵勢力との戦闘でも当然同じである。

なおかつ、今回は非^{一般}サマナーの命と重要性の高い情報が絡んでいる。2人でよし行くか、の発想で行けるものではない。

「先殴り込んでおいて後始末に人連れてくればいいだろ。それこそセフリ連れてくるとか。仲魔いるし。」

「あーセフリ昨日新人拾て来て今日バツタバタやったから無理やと思う。」

「ウソだろ!?アイツそんな事できんの!？」

「お弟子君トラブルと説明不足で死にかけとったな。まア、連絡はするか。」

「……………」

あーあと呟く2人と置きっぱなしにされたイサカ。

拉致被害者な事以外は基本的に一般人なので当然ではあるがなんせ場所が特殊だ。

「話ずれてんぞ人足りねえぞ。オレはコイツいるし出ないからな。」

「ヤマト、俺、イサカ、セフリ…あと誰？」

既に約2名を確定条件として扱って計算するヤマトに突っ込むのは誰もいなかった。

「いつそアレは？デイム。」

「却下。」

「他が良くてもオレが嫌だ。あの狗。」

バツサリと斬り飛ばされるイサカの意見。

それも当然、デイムとは現実世界で活動するサマナー：異殻のサマナー ニューエイジと区別してオールドエイジと呼ばれる連中の1人である。

異殻と現実世界両方で活動可能なサマナー… どんな役割をしているかは察される話だ。

「どちみちこんな面倒臭い事件バレルから今のうち巻き込んで適当にする手はあると思うけど。セフリとマコトのオツサンの心労も考えて。」

オールドエイジとの交渉担当は主に切先セフリと異殻最強の交渉人ことマコトだ。

マコトはともかく、セフリはいつもブツブツと文句を言いながら始末をつけている。

イサカも役割柄、2度ほど出向いた事があるが2度とも5分と経たずにその場で乱射したいと思って過ごしていた。

「まだ早いだろ。報復でやったらなんかしたよ、くらいで行かねえと。」

「うくん… じゃあ誰よ。」

そんな話をしているうちにヤマトから返信が来る。

「アタリ〜。ついでに参戦確定。」

「よし3人でもいいから行くぞ。」

「返信が来たからしやらないしやらない。」

言葉尻が残念そうでないのはハヤトはガイアーズを早く沢山締め上げたい為であり、イサカの方は資料と被験体の情報狙いだ。

自分達からの奇襲なら何処だろうがガイアーズ程度に負けないと

いう自信もある。

最も、そんな相手でも状況が悪ければ先程のイサカのように苦汁を飲むハメになる事もなくはないが。

「今日平日なのを後で思い出して苦労しろ。」

恐ろしい事実を2人の背中に叩きつけてヒロは2人を見送った。

合間の一時

恥ずかしいことに貧血で行動不能になりセヲリに担がれて武器屋に戻ることになった僕は例のソファに双子と座らされて反省会の最中だ。

「だからあんなの来るなんてわかるわけないつつてんだろ！」

「だとしてもこいつらなんの武器使ってるかくらい覚えてんだろ目の前で人の頭潰れたら普通はひっくり返るんだよ。そもそもなんだその訓練方法は？お前は後輩を殺す気か。」

反省会というよりは言葉で殴り合っているのに近い。セヲリとミナモトが。

「セヲリに普通求めるのも無理あると思うけどな。」

「私も知ってるからね。セヲリの話。」

何があつたんだこの人は。

「んーとね？なんだっけ？色々あるよね。」

「1年目に何人かに嫉妬されてスマホ取られてチヨダのどっかの駅に放り出されたとか？」

怖すぎる。

チヨダに該当する辺りは絶対に近づくなと釘を刺された危険地帯だ。

どうやったかわからないが共謀して放り込む方もだがスマホなし… 仲魔も呼ばずに帰ってきたセヲリもセヲリでとんでもない。

そういうえば2度と御免とか言っていた気がするがそういうことだろうか。

「他何？妖精事件か？」

「それって協定違反した妖精を片っ端から殺したっていう？」

「あ、知ってた？それぞれ。凄かったらしいね。関わった妖精はもちろん、反撃したやつも殆ど穴だらけにされたらしいよ。槍で。」

穴だらけってどういう事。

「そーよ、あの時あたしみたいにとぼつちり受けた方はどんだけ怖かったと思う？立ち向かった騎士もみーんな殺されてたのよ？どっちが悪魔がわかんないわ。」

ジャックフロストと一緒にお菓子を齧っていたピクシーが膨れっ面で会話に参加する。

「そんな事あったのに僕殺されかけたの？」

「でっしょく？ホント虫みたいな頭してるんだから。アイツら。」

「虫みたいなのは羽だろ。」

「お兄ちゃんそうじゃない。」

「人の災難で何盛り上がってんだお前らは。」

ミナモトとの応酬に一区切りついたらしいセマリがぬつと会話に入って来た。

「お前がどんだけ無茶苦茶か教えてた。」

「セマリ変態だよ。意味わからなくて。」

残念な事に同意するがそれはそれとして酷い言われようだ。

「妖精事件は災難でもなんでもないと思う。」

「あたしとしてもアイツらが悪いと思うけどね。あの時点では人間の方も妖精達あたしに手は出してなかったし。でも自分から殴り込んでる時点で災難じゃないわね。」

「アンタら最高のコンビだよ。」

僕とピクシーのセリフに苦い顔のセマリ。

言いたい事と言いつ返し返せない事が大量にありそうな顔だ。

「コイツの関わってる騒ぎなんて手の指じゃ足りねえよ。なんなら片っ端から上げてやろうか？」

「私のいる所でするんじゃない。」

セマリが再び若干の殺意を醸し始めた所でセマリスマホからバブ音が聞こえた。

「お？」

「連絡？」

「んく…今すぐ手貸して欲しいって。ちよつと時間かかりそう。じ

いさん、代わりに送ってあげてくれない？家の最寄駅とかまででいいと思うから。」

そんな雑な。

「お前の急な用事なら仕方ないって言ってやる。ほらさっさと行け。」

「ありがとう〜じゃあ。」

「また来るホ。」

そう言ってジャックフロストと共に軽い足取りで出て行った。

第一次半魔工場襲撃作戦―2 強襲

「大丈夫なんですか？あの人達。」

2人を見送った（取り残されたとも言う）後、さらに細かい検査を受けていたイスカは機械と自身の腕と交互に睨み合うヒロに尋ねた。「大丈夫って何が… あ、いや知らねないもんな。そりやそうなるか刺すぞ。」

針（消毒済）を取り出してイスカの腕からサンプルを採取しながらヒロは答える。

「アイツらはサマナー… オレ達みたいなのの中でも指折りだよ。悪魔の扱いも戦い方も。よっぽど相手が悪くない限り心配する必要なんてないさ。むしろ相手が可哀想な話だ。」

「……………」

「お前の身元はオレ預かりだ。現実世界に協力者が何人かいてな、心配しないでいいさ。必ず日常に戻してやる。」

「あ、来た。」

「暫く。」

「今すぐ新宿来いってだけ言われて来るやつ私ぐらいだとは思わんか？」

指定されたビルの屋上に集まった4人のサマナー達。

ハヤトこそ待たされてピリピリしているが緊迫した空気はまるでない。

「で、何するの。」

「あそこ病院あるやろ？中にガイアーズと誘拐された人おるから殴り込み。」

「誘拐？サマナーを？」

「いや、普通の人。」

その言葉に怪訝な顔をするセヲリ。

それも当然。異殻に入ることが出来るのは唐突に迷い込んだ者と

アプリを使用するサマナー達のみ。

アプリを持つていない人間を意図的にこちら側に連れて来る事は出来ないのだ。

「何でそんな事？」

「それを今から確認しに行くんやと。」

と、1人病院を見下ろしていた『情報屋』ヤマトが答える。

「なんでも現実世界から人攫ってきて人体実験しとるとき。詳しい事は後で後でって言うからよくわからんが。」

「人体実験ンク!?」

声こそ抑えたがそんなバカなと言う顔のセフリ。

サマナーとして4年間そんな話は一度も無かったためこの反応は当然だ。

「ウエノで別れた後にながあつたのよイサカ。」

「うくん実験被害者保護してヒロのところ连接到んだ？」

「で、俺はその成り行き。」

「だからか！あんなのが出張って来てたのは！」

「ウエノでお前らなにしとったの？」

「作戦ってほどやないけど4人の役割分担はこう。イサカとハヤトが現場確保。セフリと俺は被害者救出。公式サイトのガイドと2人からの話じゃあの病院は上4階に地下1階。メインの入り口2つと夜間の入口1つ、救急の入口1つってことになつとる。俺は東、セフリは西のメイン入口から入って敵を誘導。西側には受付の広い所があるからそこでお前の造魔配置してとにかく暴れさせろ。お前は救出対象を探せ。俺は東と救急の入口に仲魔配置したら参加する。」

「よし来た。」

「イサカとハヤトは夜間の方から入って地下への道探せ。その後は任せる。」

「雑くね？」

ヤマトの指示にハヤトは首を傾げる。

「俺は地下に『何』があるか知らねーんだわ。」

「そりゃ俺達もだよ。」

「ごちやごちや言うたらんとやるで。10分後に2人で入り込むから。」

「作戦開始だ。」

入り口の見張りをしていた悪魔を一瞬で蹴散らし自動ドアに体当たりする勢いで病院内にセヲリは転がり込む。

エントランスにいたガイアーズが動く間も許さず声の限りに叫んだ。

「暴れろージード!!」

パツと帽子の上から耳を押さえて伏せた瞬間、先程のセヲリの声とは比べ物にならない大音量の雄叫びが響く。

わずか数秒で人間はひっくり返り悪魔の幾らかは戦意喪失。残ったものも明らかに孕んだ様子を見せた。

「覚悟しな。」

何に言うでもなく眩くとセヲリは飛び掛かった。

第一次半魔工場襲撃作戦―3 鹵獲

「おる?。」

「遅えよ...。」

夜間入口で見張っていた敵をハヤトが叩きのめした所に何をしてきたのかようやくイサカがやって来る。

「何してたんだよP凹MAのいい靴履いてるくせにトロ臭いぞお前。」

「ええやろ〜コラボの受注生産。ちよつと嫌がらせして来たん。」

皮肉の含んだ言葉にさりげなく自慢しながら返すイサカ。

妙に笑顔なイサカの背後をよく見ると所々何か置いてある。

「あれなんだ?トラップか?。」

「テグス。思いつきり引つ掛かったら悪魔も脚切れるかも。」

「ここも塞ぐんだから表の入口でやれよそんなの...ポルターガイスト、頼むぞ。」

「任された〜!。」

他の入口同様悪魔を配置して2人は侵入する。

激しい戦いの音が廊下の向こうから聞こえて来た。

「す〜ごい音。大立ち回りやで。」

そう言いつつ飛び掛かって来た悪魔の喉元に例のアイスピックの様な短剣を突き刺す。

喉を潰され悲鳴もあげられず悪魔はのたうち回る。

「下級ダ イ モーの名無しぐらいで止められると思うなんて片腹痛いわ。」

「どう見ても俺らみたいなの前提の悪魔じゃねーだろ。前から気になってたけど何だその短剣。」

見た目は勿論、悪魔がのたうち回っているのは喉を狙ったのもあるだろうがそのまま反撃もして来ないのは少々異常だ。

『鈴鹿』。」

「銘は聞いてないんだわサーキットかよ。」

「まあそうなるよな。違うけど。」

「違うのかよ。」

振り回され始めたハヤトにまア先に見つけるもん見つけよや、とイサカは肩をすくめる。

「地下ってエレベーターか？」

数メートル前で槍を振るうハヤトが尋ねる。

「停電なつたら困るやる。階段の一つくらいあるわな。バックヤードみたいなところ探すで。背中任せ。」

「俺を穴だらけにするなよ。」

「ちやんと一粒弾スラッゲに変えてきたわ。」

そういう事じゃない、とは当然ハヤトも思ったが何も言わなかった。

「セフリ、俺は配置完了。今どんな感じや？どこにおる？」

『こつち側の2階階段の踊り場。3割倒して2割が戦意喪失逃亡。残り半分。人は何人か倒したけど元々少ないっぽい。ちよつと逃げた。』

通信のセフリの声と共に激しい音が聞こえる。

敵は彼女にほぼほぼ釘付け状態だ。この時点での強襲を想定してなかったのだろう。

イサカとハヤトのせつかちさが今回は良い方向に動いていた。

「逃げ切られたかね？」

『それは知らない。』

「やるなあ。もう少し減らすぞ。安全と判断した時点で救出開始や。俺は上から行くから下から攻めろ。」

『了解。』

「これか。」

「やな。なんか変な音聞こえる。」

「イサカの耳には聞こえ。ガタ…という音が僅かに聞こえていた。ちよつとマジバイヨかもしれん。」

「今更帰れねえよ行くぞ。」

「待ちや、何あるかホンマわからんのだ。」

急かすハヤトを抑えてイサカはごそごととスーパーボールを5つ取り出した。

「何でそんなの。」

「それ行け。」

ポイっと全て階段に向けて放り投げる。

ポポポポポン、と軽快な音がして跳ね回っているのが見えたが階下の闇に消えていった。

「…何もおらんっぽい。」

先程から聴こえる僅かに何か擦れる音とボールの跳ねる音以外に特に音はなく、唐突に投げ込まれた物に反応して向かって来る敵もない。

「ヤマト、セヲリ、地下発見。そちらも救出よろしく。」

『了解。』

『任せ。』

「行くか。」

「よし、行こう。」

「暗いなく。」

「電気消してんのやろ。ほら懐中電灯。」

最低限に縛られた光源の中、足元を照らしながら2人は進む。

「…これか。イスカの言ってた部屋。確かに変な音聞こえてるな。」

「うわ見てこのセンサー。マグネタイトがエグい反応してるで。」

虚数表示とエラー表示、そして大量検出の表示が代わる代わる出てくる。

この反応がこの世界においても普通でないものがこの扉の先にある事を2人に教えていた。

「扉俺が開けるから構えてろ。」

「よし来た。…カウントするで、3. 2. 1. …。」

シャツと扉が開いた瞬間何かかが飛び出した。

「どわ!？」

のけぞってそのまま横にすっ飛びイサカ。かなり器用な体をして
いる。

「何だ!？」

赤い謎の物質…。としか呼べないものがぶわりと飛び出してきた。

流石の2人も一瞬腰が引ける。

「センサー反応してるこれ例の虚数マグネタイトだわ。オタマジヤク
シ飛んできたと思った。」

と、ストレージからメスフラスコを取り出すと虚数マグネタイトを
回収するイサカ。

「フラスコ使い方違くない？」

「細かい事気にすると禿げんで。それより…。」

漸く2人は中を覗き込む。

「うツ…。」

「これはユンガブラも言えへんわ。」

肉塊がいくつも転がっていた、としか言えない光景だった。

肉塊にはユンガブラ…。イスカと同じネオンの様な光があちこち
に見られる。

「これ、人間…。だよな。」

「まアそやろな。成る程なあ、適性がないところなるわけか。しかも
これ光つとるのは多分まだ生きとる。」

説明のできない顔のハヤトと腕を組んでどう扱うべきか思索する
イサカ。

「どうするよ?。」

「とりあえず閉めて。」

扉を閉めさせると少し離れた場所に移動して自分の見解をトーン
とボリユームを落とした声で語る。

「あれはまア、素人目にも無理や。サンプル回収して殺してやるのが
ベストやと思う。ただ目下、問題なのはこれをどんくらいやつとるか

や。」

「つまり？」

「この病院だけでもまだ他にもおるはずや。それにここ以外でもやっ
とつたらどうする？…この実験成功させとつたら？」

「……………」

「サンプル回収とやる事しとくから上の2人にも言うて資料なり何な
り探してきて。あるもんとにかく片っ端から。後ヒロに報告。セヲ
リに何しとるか言うなよ。未成年にこんな作業はさせへんで。」

第一次半魔工場襲撃作戦―4 撤収

ガキン！ガチン！と激しい音を立てて病室の扉に取り付けられた南京錠が破壊される。

「もー！腕痛い！疲れた！終わり！」

『撃って壊せばいいモンを。。。』

「弾もつたいない。」

現実世界とは対照的に構造上、属性弾の使用できない上に武器屋では弾倉が製造できないオートマ銃を使用するサマナーは少数だ。

その少数派の1人がセフリというわけで、戦闘以外で無闇に使うと財政負担の元になる。

そういう訳で南京錠を片っ端から槍の石突で叩き壊していたセフリは若干痛む手首をぶんぶん回しながら足で病室の扉を開いた。

「これで全員か？」

「2階から4階までは全部一応見て来たけど。もう一回見てくる。」

「よし、こっち俺に任せろ。」

『セフリ、ヤマト、今大丈夫か？』

ハヤトから通信が入る。

『今』大丈夫か？という言葉に2人の実力が見て取れる。

「丁度終わったから確認中。そっちは？」

『イサカが地下で色々やってる。資料なりなんなりあるモン全部回収して来いってよ。あと地下来たら殺すってさ。』

「殺意高ッ。」

最後の言葉は正確ではないが誰か向かえば確認なしで撃ち抜かれる事は概ね間違いない。

「あいつ基本動くモノの認識能力あらんよな。反射神経はあるのに。」
「反射神経と認識能力バカなのと『あの』運動神経を合成した結果何かわかる前に撃ってんだよ。」

そういう評価である。

「リヤナンシー、頼むわ。」

「効くのかしらねえ……。」

イサカの指示に疑問も呈しつつもドルミナーを発動。
肉塊の灯す光を見てイサカは頷く。

「……多分効いたかな。今から3分に1回掛け直して。それでも痛みや耐性であかんたら……まア。」

そう言つてストレージからメスを取り出すと足元の肉塊に刃を入れた。

パンパンパンパン！と、火薬の弾ける音が立て続けに聴こえ、被害者達が悲鳴を上げた。

「イサカか？」

『ごめん、サプレッサー忘れとつた。ついでにそつちどう？』

当の本人から通信が入る。

「救出完了。アンタに言われた資料集めも大体終わった。あとは捕まつてた人をどうするかかな。」

「あとハヤトが屋上で見張つてくれとる。」

『今んとここつちも問題なし。だーれもいねえし来ねえ。』

『こつちももう少ししたら終わると思う。じゃ、よろしく。』

「待ったさつきなんでそんなぶつ放した……切られた。」

ゴーイングマイウェイめ、とセフリは舌打ち。

『……悪魔出たんだろ。』

「どうだか。なんか妙だったけどな。」

普段は銃に負担がかかるからと言つて絶対しないような連射だった。
余程危険な相手がいるかそれとも……。

『セフリ、妙な連中が見えた。』

「何。」

『先頭は燃えてるバイク。アレ多分あく……。』

「ゲツ、それ魔人。」

『ハア!?!』

予想外の言葉にハヤトは驚愕。足を纏らせでもしたか転んだ音がした。

「ヤバイな今来られたらあの人達死ぬかも。」

『その魔人ってガイア教か？バイクと一緒にいるし。』
「……。」

『おい黙んな。』

「お前そうですっつたら飛び掛かるだろ。」

騎兵戦に優れたハヤトも魔人相手では流石に少々危険だ。

しかし、安全は確保したい。魔人が彷徨いては被害者達を連れ出せない。

イサカとハヤトせっかちはここでしつかりと仇になった。

「うーんジレンマ。」

腕を組むセヲリに元凶1号…ハヤトから再び通信が入る。

『セヲリ、ヤマト、ヒロから連絡来た。仲間に協力してもらって捕まった人の移動手段確保したから指定の場所に連れて来いってさ。』

「バスでも呼んでくれたんかね？」

「そっか、いやアイツも噛んでたなアと呟くヤマト。」

「聞いてないんだけど。」

『無理して頼んだから速やかに済ませろってさ。俺はあのバイク誘って安全確保する。』

「お前が殺りたいだけだろそれは。」

『うるせえ、一石二鳥だろ行くからな！』

金網を飛び越える音がして通信が途切れた。

「飛び降りたなアイツ。」

「どいつもこいつも無茶苦茶だと呟くが、特大のブーメランである事を忘れてる。」

『セヲリ、ヤマト、こっち作業完了。手伝う事ある？』

「ハヤト暴走。ヒロが手配して被害者の移動手段確保。現実世界のここに連れて来いってさ。」

『暴走でなんやねん。とりあえずそっち行くわ。早よ終わらせてしま

日常の中

ぐったりと頭を机に乗せてホームルームを聞き流す。

普段は面白い話など無くてもそれなりにちゃんと聞いていたが今日はちよつと無理だ。

いくら時間が取れて休んでいても包丁以外のもので肉を切ったり命をかけたチャンバラをしたあの感覚が残ってしまっていてどうもダメだ。

おまけに（一応）女の子に担がれたし。

大きく溜息をついた所にガツ、と頭に何か乗せられた。

「あだつ。」

「何、五月病治んないの?」

「違います…。」

同級生のリオンだ。驚くべき事に中学から一緒のクラスで変わった試しがないのでお互い遠慮がない。具体的には頭に肘を置かれるくらい。

「いつもは虚無顔でちゃくんと話聞いてっからさくどうしたどうした明日は休みだぜく?」

「命の重み感じただけ…。あとお前の肘。」

「は?」

僕の頭から腕を退けると隣の席に勝手に座る。

「何、夜通しゲームでもしてた?面白いやつ?」

ちよつと殴りたい。

「それだったらいいけどな…。まあなんでも。」

「なくんくだくヨくその下手くそなはぐらかしはく!教えろよく。」

「うるさい、うざい、ほら掃除始まるんだから出てけお前当番2階だろ。」

抱きついて来てゆさゆさ揺すってくるリオンを引っ剥がすとシッシと追い払う。

「後で教えてなく!」

「蹴るぞ。」

ケタケタ笑いながら去って行くリオンを見て再び溜息を吐くが、少しあの『異常』を忘れて安心した。

でもまあ、あんな事が起きた事なんて言えないし、言えば言ったで頭を心配されるだろう。

黙っておく事に越した事はない。越した事はないが、コイツはしつこい。しぶとかった。

「教えるよ。」

しつこい。しかも偶にコイツ麻葉犬の才能あるんじゃないだろうか?と思うくらいカンがいい。

下校途中にふらふら〜ふらふら〜と僕に張り付きながら聞いてくる。

中学校が同じ・・・家が近いんだからこれがずっと続いている。

「だーから調子悪かっただけだって言ってるんだろ何回言わすんだお前。」

「いや、俺にはお前に何か悪魔にでも追いかけられた後のような疲労感を感じた。これは何かメンタルショックを受けたとカンが言っている。」

追いかけてこそいないがどんな例えと的中率だ。恐ろしい。

「言わない。これは僕のプライベート。」

「ケチクサクッ!」

「私も教えて欲しいですね。昨日セヲリが何してたのか。」

「あのね・・・。」

そこでハツ、として振り向いた。

なんで言ってもいないセヲリの名前が出てくるんだ?

そして、今のは誰だ?

振り向いた場所には変わった格好の女の子が面倒そうな顔をして立っていた。

説明が難しい。袖の長くて黒い甚平の上だけ着てあとはスーツみ

たいな格好だ。

あとめちやくちや髪が長い。初音ミクもびつくりな毛量の黒髪をポニーテールにしている。なんなんだ、この子。

「どうした？いきなり。」

リオンの方は唐突に増えた人間に違和感を感じていないようだ。

ここであのカンを働かせて欲しかった。

「ダメですか。今回の新入りは手強そうですね。流石セヲリの弟子。」

「リオン、この子誰かわかるか？服装どう思う？」

女の子を指差して尋ねてみる。

「何言ってるんだ、 だろ？服は別に普通じゃん。女の子の服装にケチつけるとか失礼だぞ？」

名前を言えていない。よくわからないが知らない筈の人間なんだろう。

そして最後の一言は余計だ。殴りたい。

異殻の関係者なのだろうか。僕らと同じサマナーなのか、それとも昨日襲って来たガイア教なのか、未だ見ぬメシア教という連中なのか。

いや待て。

初日にセヲリに聞いた話にあった。

現実世界で活動するサマナーがいる、と。

「… 現実世界のサマナー…？」

「基本を抑えてて感心な事ですね。セヲリの教えがいいんでしょうか。」

そんな事はないです。大分ヤバイです。

「僕に何の用ですか？こんな道の真ん中で友じ… 同級生も巻き込んで。」

「今なんか俺の関係性訂正しなかった？」

リオン、もうお前帰って。邪魔。

「切先と学者、技師に情報屋が動き出したと聞きました。話は聞きた

いけどみんな一筋縄では行きませんから。貴方なら都合がいいと思
います。」

ゲームで弱い敵から狙ってこうみたいな感覚だろうか？

間違っていないが大変腹が立つ。

「僕はセフリが呼ばれて出て行った事しか知らないんですが。」

ついでに言うと言と技師……は聞いた気がするが情報屋もよくわから
ない。誰だそれは。

「都合がいいから、です。貴方がダメなら貴方を対価にすれば良い。」

これ誘拐されるやつだ。どうしよう。異殻に逃げ込んだら……
もっとヤバイか。ついでにリオンに色々バレル。

じり……と、一歩下がった所で助っ人はやって来た。

無視鬼の協力者

「あぶね、間に合った。」

やや締まらない声がして男の人が僕と女の子の間に割って入る。

「お前がオールドエイジのデймか？話通り変な格好してんな。イタいぞ。」

「いきなりなんですか貴方。」

それは僕も思った。

唐突に現れた灰色のキャップに灰色のシャツ、黒いジーンズに目つき悪い男の人は僕（とりオン）の前に立ち女の子… デймと睨み合う。

「俺は勇。アンタらの言う『技師』に腐れ縁で手伝いをしてるモンだ。アンタらが嗅ぎつけてコイツ狙ってる事に気づいたはいいが誰も手が空いてなくてな、俺らに鉢回ってきたわけだ。よろしくしてくれなくて良いぞ。関わりたくねえ。」

「技師の…!？」

「これどう言う状況？」

「僕も聞きたい。」

あの人達何したの？

訳のわかっていない僕らを置いて話は進む。

「一般人を巻き込んで使うなんてまた勝手な真似を…!」

「今のお前にやブーメランだよ。用があんのは誰ぞの弟子なんだろ？2人いるなんて聞いてねえけどな。でだ、俺らはそいつを守れとも言われたがこれを渡せとも言われた。ほれ、今ここで読めすぐ読め。」

どこからともなく茶封筒を取り出してポイと放り投げる勇。

デймは訝しげだったが受け取った封筒を開けて中身を読む。

「…これは私に判断できる内容じゃありません。」

「言うと思ったぜ全くやつすい言葉しか言わねえな。だったら上にさっさと聞けよ。お前らだってスマホくらい使えるだろ？」

「その人を確保した後になりますよ。」

「力付くか？辞めてくれよ警察来たら俺が捕まるんだから。」

勇もサマナー相手にやる気満々である。僕どうすればいいんだろう。加勢？

「人避けはしてありますよ。それでも、悪魔も見られない貴方に敵うとでも思ってるんですか？」

「確かに俺らはお前らの言う悪魔なんぞは見たことねえな。が、人避けしてあるのに俺らが入って来てるからにはそういうモンは対策されてると思ってるねえのか？」

確かに。第一ニューエイジに現実世界のサマナーを相手するよう派遣されてるのに対策してない方がおかしい。

「あと、お前の相手は俺の妹が相手してくれてる。妹は俺より手が早くてな、ぶちのめされてるかもしれないねえな。」

「なっ!？」

「そういえばずっと俺『ら』って言ってたなあの人。」

「そういえば言ってた。」

あの人すごい早口だから聞き流してた。

「ちよつと新入りと非サマナーだからって舐め過ぎだお前ら。ガキだって機関銃持ったら兵士なのと同じようにちよつと工夫したらお前らとは並べるんだよ。いい事かどうかは知らねえけどな。お？俺とやるつもりか？」

「任務は遂行するから任務なんですよ。」

「撤退も出来ねえなんて頭の悪い奴らだなあ、オイ。俺は拳だけなら広より強いぞ。第一俺の妹もいるのに勝てると思ってるのか？」

ベキベキ拳を鳴らし始める勇。

これは血が流れるやつか？下校中だったのに勘弁して欲しい。

「貴方と妹さんが私達より強い証拠がどこにあるんです？」

「脳筋みたい。」

僕の呟きに勇とリオンは吹き出した。

「偶に容赦ないよなお前って。」

「言われてるぞ脳筋。」

一瞬間を赤くするデイルム。

男3人に馬鹿にされる1人の女の子という酷い構図だが、これはもう向こうが悪い。

「デイルムが踏み込んだ…！と思った瞬間、電話が鳴った。」「!?」

「ああ、やつとか。お前だぞ。出ろよ。」

「じり…と踏み込んだ3倍は後ろに下がるとスマホを取り出して電話に出る。」

「…わかりました。」

それだけ言うത്スマホをしまい立ち直る。

「時間稼ぎが本命ですか。」

「当たり前だ。お前みたいな木っ端に誰がこんな緊急性の高い交渉なんかするか。狗。」

「口悪く。」

「可哀想になつてくるな。」

それはない。

「桜が連れてつてくれるだろ。俺はこいつら回収しなきゃいけないだ。ほら、消えた消えた。」

シツシツ、と追い払われるようにデイルムは去って行った。

「さて、と。セヲリの弟子。」

「あ、はい。」

「お前、家遅くまで出てても平気な家か？」

「えーと連絡すれば外泊しても怒られない系の家です。」

主に夕飯の行方を心配される家です。

「じゃあ今から連れて行くから連絡しとけ。で、こっちはどうするか。」

「なあお前弟子とかなんなの？秘密にしたのこれか？」

そうです。結局バレちゃってる。

「うくんこっちも連れてくか。お前家は？」

「あ、うち夜中まで誰も帰ってこないんで全然。」

「よし。こっちはこっちで預かる。じゃあ来てくれ。連れてくから。」
僕とリオンは勇に連れられその場を後にした。

「どこへ行くんです？」

「お前は光が丘。広つてのがあるから従ってくれ。後でイサカ…？
とセフリも来るってよ。そっちは俺と一緒にその辺の店。仲間と集
まるついでに奢ってやるよ。」

「やった、もうけ。」

「凄いなお前。」

凶太い神経持ってるやつだ。僕には真似できない。

禍の中へ

「よお広。アタリだったぜ。」

光が丘団地の駅すぐそばの道端で待っていた男性…。ヒロにしたかしてないかわからない挨拶と報告と共に僕は車から放り出された。

「助かった。悪いな…。けどその後部座席の少年は？」

「巻き込まれた少年A。囲い込もうと思って。」

「囲い込んでもらいます！リオンです！今後ともよろしくお願いします！」

殴りたい。

「…任せた。」

ヒロは目を一瞬逸らして諦めたようにため息をついた。

「自己主張遅れたな。オレはヒロ。例のアプリとか悪魔の研究をしてる。技師って言えば大体わかると思うから。よろしく。」

団地までの道を歩きながらヒロはゆったりと説明を始める。

「詳しい説明は揃ってからするんだがゆうベイサカが前代未聞の大事件拾ってきてその関係でセマリが暴れたんだがそれをオールドエイジが嗅ぎつけたらしくてな、交渉手段にお前を使おうって強行に出られたわけだ。」

どこもかしこも超不穩。

あの人達一晩のうちは何してんだ。

「そんな勝手にさせるわけにはいかないから条件をつけることで事任せるように交渉、誘拐の方もオレの仲間頼んで妨害してもらって時間稼いで何とかしたってわけだ。で、お前連れてきたのは同じような事がまたあったら困るって言うのと巻き込んだ責任とりだな。あと、セマリが暫くこっちにかかりつきりになりそうってのもあるからお前もこっちに入れちまえってなったのさ。」

「それいいんですか？」

色んな意味で面倒臭そうでもあるんですけど。

「最前線で何やってるかが見られるとも思っておきやいいんだよ。巻き込まれたからには教えておくべきだし知りたいだろ？」

「関係者各位、オレもイサカもヤマト秘密ばつかだがその辺はちゃんもしてるさ。」

エレベーターを使って目的の部屋に辿り着くと既に1人待っている人がいた。

僕よりは年上だがヒロよりは下だろうか（ヒロは大変年齢が分かりづらい容姿だった）若い男の人だ。

「あ、おかえりなさい。」

「ただいま。調子どうだ？」

「大丈夫です。何もありませんでした。」

イスカと名乗った男の人はやや不安げな顔で頷いた。

「他の連中はあと1時間もすれば集まるからそれまで新人君2人にサマナーの色々教えてやるよ。イサカほど上手くはないけどな。」

そう言つてヒロはパソコンチェアに座るとタブレットを取り出して話し始めた。

「来たぜ。」

「何その屍は。」

僕と同じ年くらいの少年を引き連れやつて来たセヲリから一発目に出たのは僕とイスカの惨状だ。

僕らは2人してぐったりと地べたにひっくり返っている。

とんでもない情報量だった。

イサカが一つ一つゆっくりわかるまで教えて次にいくならヒロは大量に詰め込んで後で自分で復習して覚えさせるタイプらしい。

しかも結構専門用語がポンポン出てくる。注意深く聞いてないと話の全部がわからなくなるだろう。スパルタだ。

「オレはやっぱり人に教えるのに向いてない。」

デスクで頭を覆いながら呟くヒロ。やっつてマズイと思つたらしい。

「あゝ… ヒロ専門用語が多いもん。中級者向けなら全然いけると思うけど。私よりは。」

「最後お前も傷ついてなかったか？」

「で、他の人は？」

「イサカはコイツより先に大熱唱しながらやって来て
来たら起こしてつっつて隣の部屋で潰れてる。異殻にいるからもう
7時間は寝てるな。」

「寝汚ねえ。」

「今に始まったことじゃないじゃん。」

「俺はハヤト。普段はあっちこっちの学校とか、施設に危険な悪魔が
単食わないように見回ってる。騎兵って言ったら通じるから。よろ
しく。」

僕と同じくらいだがメチャクチャ強いらしい。

かっこいいな、騎兵って。

「その人が例の？」

「ああ、名前はイスカ。」

「セフリです。よろしく。」

各々、自己紹介を終えるとヒロはパン、と手を叩いた。

「自己紹介はこの辺だな。セフリ、イサカ起こして来い。どうせ自分
じゃ起きねえからアレ使って起こせよ。」

「アレ？」

「それってすごい強烈な眠気覚ましみたいなヤツですよね。」

イスカは嫌そうな顔をして尋ね、頷くセフリにさらに嫌そうな顔を
した。

経験済みか、この人。

「イワクラの水、パトラストーン。どっちも状態異常回復アイテムつ
て所かな。イワクラの水の方が安いしもっといいヤツにアムリタ
ソーダとかある。」

そう言つて妙な（少なくとも光の反射が水ではない）液体を取り出
した。

「使い方は簡単。粘膜に触れさせる事。つまり顔にぶっかければ大体
オツケー。」

嫌だな。言い回しもだけど変な液体顔にかけられたくない。そも
そも顔にかける時点でアウトだ。

「しかもアレめちやくちやキツイよ。酔いがいきなり覚める感じ。」

未成年なので想像するしかないが確かにキツそうだ。

「イサカの反応面白いから来なよ。爆笑するから。」

お礼参りのない事を祈ろう。

異殻の、さつきまでいた部屋の隣ではヒロの言っていた通りイサカがフローリングの上で潰れるように寝こけていた。

「絶対体痛いのによく寝るよね。」

「だから寝汚ねーんだよ。」

「あ、光ってる。」

セヲリがイスカを見て呟いた。

確かに腕や服の下が緑のネオン色に光っている。

「あ、これは……。」

「そんな事よりさつきと寝坊助学者起こそ。」

「あ、はあ。」

見られても大した反応のない僕らに逆に動揺するイスカ。

「セヲリはともかくお前も普通なの意外だったぜ。」

光ってるくらいなら害ないし。

大変気不味そうなイスカには悪いが今の僕としては槍を振り回して悪魔の群れや人を殲滅するセヲリや現実世界でよくわからないパワーを使つて攫おうとしてくる連中の方がよっぽど不思議だし怖い。人に襲われたのを思い出すと尚更だ。

「僕にはセヲリの方が怖いです。」

「成る程。」

「おい。」

僕に刺々しい視線を向けながら（つまり見向きもせず）イサカの顔にイワクラの水の容器を逆さにした。

「なーすんねん!!」

喧嘩中の猫のような潰された蛙のような表しきれない声を上げてイサカは飛び起きた。すげえ効果だ。

「これどこで手に入りますか?」

「悪魔が売つてたり武器屋にもいくらか。」

イサカとセヲリが騒いでるのにイスカが呆れるのを無視してハヤトに入手法を聞いておく。昨日のうちに理解したが構ってるだけ無駄だ。

「起きたな。ヤマトも他の連中も来たから始めるぞ。顔洗って来い。お前が解説役だろ。」

かなり不満そうだったがそれを聞いてイサカは一度現実世界に戻って文字通り顔を洗って戻ってきた。

先程の部屋には知った顔も知らない顔も合わせて10人ほどが4つ合わせた机を囲んで座っていた。

イサカは開けられた場所に僕とイスカはセヲリの後ろに座って知らないサマナー達の名前なんかを教えてもらう。

皆何かしら実力や能力を持つサマナーらしい。

僕の間違った感じが半端ない。

「先に初めてのもおるし改めて紹介しとこか。イサカや。異殻と悪魔に関わる文化調査担当ってとこやな。学者でも通じるから、よろしく。さて。」

そう言って2枚の紙を取り出した。

異殻資料編纂―2

悪魔

オベロン：オーベロンとも。
ルーツを辿ると北欧神話の神に行き着くとされる妖精達の王、またはティターニアの王配。

『真夏の夜の夢』ではティターニアとの喧嘩から配下に命じて人間に恋をさせ、トラブルを引き起こした。

ティターニア：タイテーニア、日本ではタイターニアとも。

ウィリアム・シェイクスピア『真夏の夜の夢』に登場する妖精達の女王。

誇り高い性格でオベロンと対立するがオベロンの計略からロバの頭をした男に恋させられるという被害を被った。

ピクシー：イングランド南西部に伝わる妖精。

姿についてはまちまちだが、小人のような小さい身体であることは共通している。悪戯好きだが概ね良いモノとされており、人間と共生関係にあるという。

その他

上野恩賜公園：西郷像とパンダで有名な台東区の恩賜公園。

異殻では妖精達のテリトリーとなっており、妖精王国の別称を持つ。

3年前にニューエイジと交渉、理由なき戦闘禁止の土地となった。

恩賜公園とは、皇室から下賜された土地に作られた公園という意味がある。

1873年開園。

協定経緯：メシア・ガイアの大抗争を切っ掛けに行われた妖精達との協定。

敷地内での相互の同意のない戦闘・攻撃を禁止し、両者の安全地帯とする事が義務とされている。

破られた場合は破った者を破られた側が好きに扱って良い。

元々セヨリが『妖精作戦』という名前で行おうとしていたが交渉前日に『ケートハブン作戦』に変更させたという逸話がある。

これをきっかけに、各地の恩賜公園で協定が結ばれた。

ホイッスル：イサカが新人達にいつも渡している笛。通販で購入している。

デザインはその時によって変わるが120dB（飛行機のエンジン周辺）以上の音が出せる事、金属製は共通する。自身の危機を知らせたり周囲への危険勧告にとっても有効。

武器屋の武器

ミナモトが売る武器の殆どは彼の仲魔達によって製作されており、使用者の好みに合わせて時に素材や悪魔と合体させ、調整を行なっている。

どの武器を取っても質は高く長く使える物ばかりだが、それぞれの獲物や悪魔と戦うという性質上、消耗品のようになってしまいうサマナーもちらほら存在する模様。

イサカM37―丹生：サマナーイサカが愛用するショットガン。

同じ名前だが、銃の由来はNY近郊の地名。異殻でも通用するように属性弾やスラムファイアが使用可能な様に改造が施されている。

丹生は日本最古の水銀鉱山の名前。

短槍―陸別：セヨリの愛用する槍。

競技用薙刀と比較しても非常に短く、150cm程しかない。

氷結属性に特化した作りになっており、敵を氷漬けにすることも可能。

陸別は日本で最低気温を記録した北海道の地名。

短剣―23：ヒロの短剣。

銘にある様に基本的に23本で構成される。

突き刺す事に特化しており、投擲して使用。紛失・破壊した分は武器屋で再生産される。

持ち手部分の細工で使用者のスマホと連動しており所在が判る様になっている。

23は日本で最も人口の多い土地の総称。

手斧―濃尾：ヒロのもう一つの武器。

消防斧に近い見た目をしているが使用者の特性上、属性が付与できない為頑丈さに全振りされており何かに叩きつけても刃こぼれ一つしない。

濃尾は戦国の三英傑の出身地である平野の名前。

異殻資料編纂―3

登場人物

アリス

主人公と同年代の少女。双子の兄にジョバンニがいる。若干ズレた性格で自身と周囲の状況が一致していない時がままあるが兄と一緒にいると反比例してまともになる。

ジョバンニ：特攻

主人公と同年代の少年。双子の妹にアリスがいる。

セフリに続く次鋒役で彼女より火力が高い。

頭が回らないわけではないがあまり後先は考えていないので時々アクシデントや物理制裁で痛い目に遭っている。

『ジョバンニ』は名前ではなく苗字が由来らしい。

率先垂範：本来の意味は『人の先頭に立って物事を行い、模範を示すこと。』

ガイア教徒の1人と思われる女性。

呑気でフレンドリーな口調だが思想は強者を重んじ弱者を排斥するガイア教そのもの。

ハヤト：騎兵、七列風神

18歳の少年。非常に落ち着いていてドライな性格だが、ガイア教徒に対しては激しい感情を見せる。

騎乗しての戦闘がサマナーで最も強く、両刃のついた槍を使用するが状況に応じて竜騎兵にも化ける。

悪魔

イソラ：アズミノイソラ。神道の神で海の神と言われており、神武天皇の父神や岩戸開きの際鏡を差し出した神と同一の存在とも言われている。

太平記では顔に牡蠣や鮑を貼り付けた非常に醜い神とも書かれているが、舞に誘われて姿を現し神功皇后に力を貸したという伝説が残っている。

オルトロス・『速い』という意味を持つテューポーンとエキドナの間
に生まれた双頭の犬。

兄弟に地獄の番犬ケルベロスや多頭の毒竜ヒュドラなどを持つ。

クレタ島で牛の番をしていたが牛を求めてやって来たヘラクレス
に殴り殺されたという。

ケルピー：スコットランドに伝わる馬の姿をした魔物。

人間を大人しく良い馬を装い乗せようとするが乗った瞬間水に入
り苦手な内臓以外の全てを食い尽くす。しかし、乗りこなすことがで
きれば右に出る者がいないほどの駿馬として活躍するという。

その他

死体処理：戦闘時、特にガイア、メシア両教団と戦う時は必然的に
死者が発生してしまう。

サマナーであれば可能な限り現実世界にて埋葬を行うが、両教団員
であった場合やあまりに凄惨な状態になった時は異殻にて火炎の魔
石・魔法を使用した処理を行う。この処置を怠った場合悪魔に食い散
らかされる危険性がある為、発見時、あるいは発生時は必ず対応する
ことが求められる。

陳勝呉広：本来の意味は『物事の先駆けとなる人、真つ先に行動す
る人。』

ガイア教徒におけるセヲリの呼称。なお、この熟語の由来となって
いる人物はどちらも味方に殺されている。

ガイア教は強者であれば誰であろうと、サマナーやメシア教徒にも
畏敬を込めた二つ名を付けている。

名前の由来は主に四字熟語である模様。

魔人：人型、頭部が骨という共通点を持った詳細不明な悪魔達。

死を与える事に特化しているとも何かに全てを捧げた存在ともいわれている。

皆強力な存在であり異殻のサマナー達にとっても最も恐しいものの一つ。出会う事があれば生きて帰れるかは運次第。

ユンガブラ：イサカが発見した改造人間につけた便宜的な呼び名。『改造人間』『人造半魔』に感じられる表現を避けている。

正式な発音は； ユンガブツラ、' でオーストラリアにある地名。

カーテンフイグ国立公園という観光名所がある。

六陣氷神：いつの間にかセヲリにつけられた二つ名。

六陣は九字から取られたようで現在七列まで確認されている。参考基準は強さだけでなく、何か他に高い能力を持ったサマナーである模様。名付けられた本人達が名乗ることは滅多にない。

レポート

ユンガブラ発見時記録レポート

著者：イサカ